

長野県埋蔵文化財センター年報27

2010

財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター



北裏遺跡群木棺墓



北裏遺跡群方形周溝墓



地家遺跡全景



地家遺跡出土木簡



千田遺跡出土土偶



上五明条里水田址出土八稜鏡

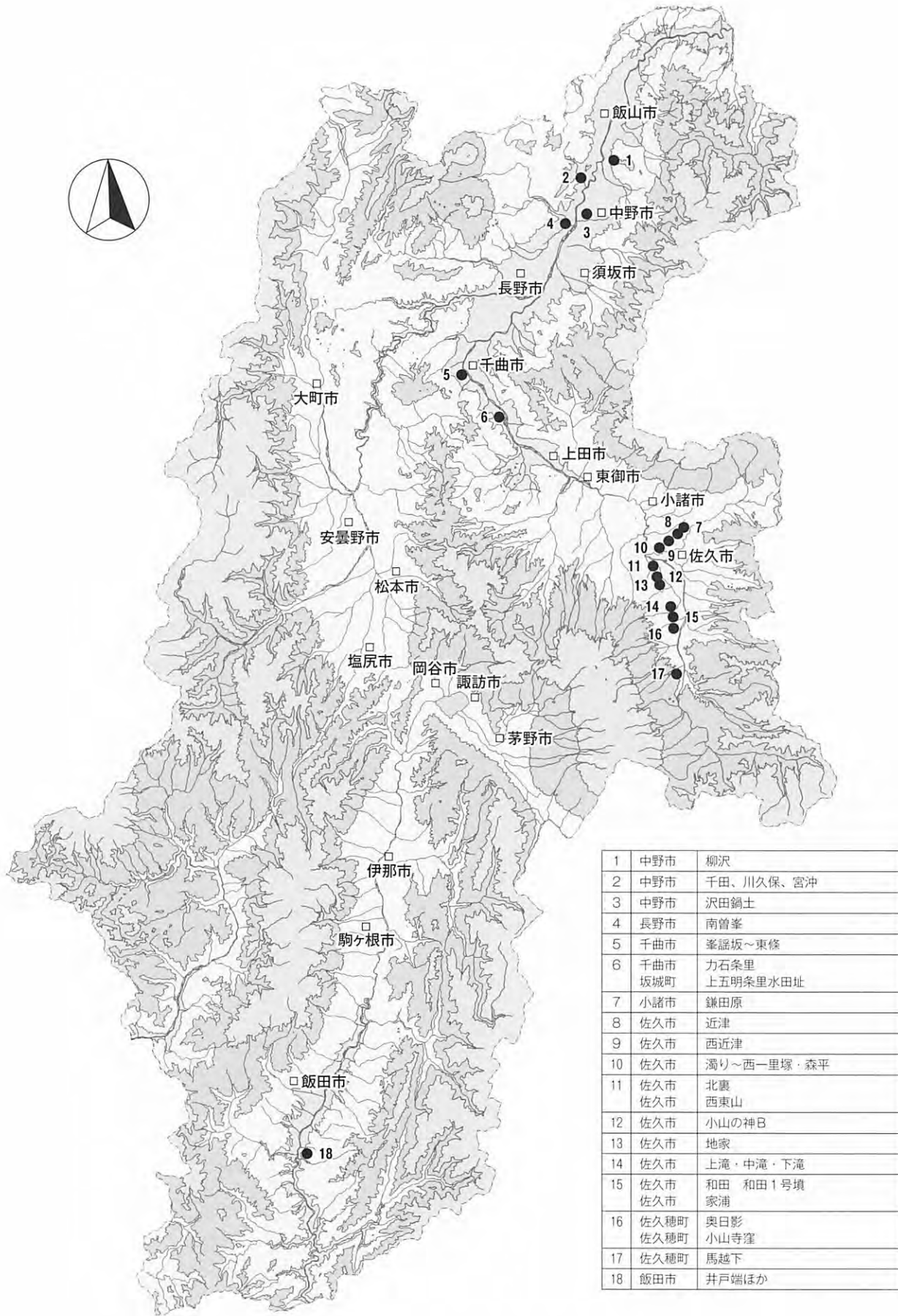
目 次

□絵写真

- ・佐久市 北裏遺跡群木棺墓
北裏遺跡群方形周溝墓
地家遺跡全景
地家遺跡出土木簡
- ・中野市 千田遺跡出土土偶
- ・坂城町 上五明条里水田址出土八稜鏡

目 次

I 2010年度の事業概要	1	IV 普及公開活動の概要	
II 発掘作業の概要	2	(1) 展示会・講演会	31
(1) 北裏遺跡群	3	(2) 現地説明会	32
(2) 西東山遺跡	6	(3) 夏休み考古学チャレンジ教室	32
(3) 小山の神B遺跡	8	V 研修等の概要	
(4) 地家遺跡	9	(1) 講師招聘などによる指導	33
(5) 上滝・中滝・下滝遺跡	12	(2) 全埋協等への参加	34
(6) 和田遺跡 和田1号墳	14	(3) 研修および資料調査	34
(7) 家浦遺跡	15	(4) 学会・研修会などでの発表	35
(8) 奥日影遺跡	16	(5) 市町村・関係機関などへの協力	35
(9) 小山寺窪遺跡	18	(6) 学校関係への協力・指導	36
(10) 馬越下遺跡	20	(7) 資料の貸し出し	36
III 本格整理作業遺跡一覧	22	VI 組織・事業の概要	38
(1) 柳沢遺跡ほか	23	(1) 組 織	38
(2) 東條遺跡ほか	26	(2) 職 員	38
(3) 力石条里遺跡群ほか	27	(3) 事 業	39
(4) 西近津遺跡群	28		
(5) 下村遺跡（鶯ヶ城跡）ほか	30		



1	中野市	柳沢
2	中野市	千田、川久保、宮沖
3	中野市	沢田鍋土
4	長野市	南曾峯
5	千曲市	峯謡坂～東條
6	千曲市 坂城町	力石条里 上五明条里水田址
7	小諸市	鎌田原
8	佐久市	近津
9	佐久市	西近津
10	佐久市	濁り～西一里塚・森平
11	佐久市 佐久市	北裏 西東山
12	佐久市	小山の神日
13	佐久市	地家
14	佐久市	上滝・中滝・下滝
15	佐久市 佐久市	和田 和田1号墳 家浦
16	佐久穂町 佐久穂町	奥日影 小山寺窪
17	佐久穂町	馬越下
18	飯田市	井戸端ほか

図1 平成22年度 調査・整理対象遺跡の位置

I 2010年度の事業概要

今年度は6件の開発事業にかかる発掘・整理作業を受託し、速報展等の自主事業を行った。

発掘作業のうち、調査の対象となった遺跡は10か所、総面積62,227㎡で、中部横断自動車関連事業のみである。また、23遺跡の整理作業を進め、報告書は2冊刊行した。事業費総額は5億5,997万円（対前年度比86%減）である。

以下、発掘成果を中心に時代ごと概観してみる。

■**縄文時代** 前期および中期初頭の堅穴住居跡がある上滝・中滝・下滝遺跡（佐久市）では、黒曜石製の石器のほかに、玦状耳飾りが出土している。北裏遺跡群（佐久市）では縄文前期の土坑1基が検出された。縄文時代の調査事例があまり多くない地域の、資料としては貴重といえよう。このほか、いくつかの遺跡で黒曜石片が得られているが、遺構は確認されていない。

■**弥生時代** 北裏遺跡群では、中期から後期にかけてのムラと墓群が確認できた。墓の種類には礫床木棺墓、方形周溝墓、円形周溝墓、木棺墓などがある。とくに、木棺墓には後期の壺、甕、高坏がまとめて置かれ、焼土も伴うなど特異な出土状況で、炭化した棺の板跡も観察されている。県内でも類例の乏しい遺構であり、佐久平における千曲川左岸の弥生時代の様相を考える上で重要な発見例である。今後の研究に期待される。この木棺墓の周辺には4か所の土器集中が検出されている。壺や鉢等の赤く塗られた小型の土器を中心とする完形土器が並べられており、木棺墓に関連する祭祀が行われていた可能性も考えられる。

北裏遺跡群に隣接する台地上にある西東山遺跡（佐久市）では弥生後期のムラが調査され、両遺跡の立地や集落の構成の比較や、その変遷を考える上で興味深い。

■**古墳時代** 北裏遺跡群の方形周溝墓の一部は、古墳時代初頭に属する。古墳時代前期の堅穴住居跡が検出された上滝・中滝・下滝遺跡は、山裾に立地する小規模集落と考えられるが、該期の地域開発の経過を検討する上で、参考になる事例と言えよう。

■**奈良・平安時代** 奥日影遺跡（佐久穂町）では、奈良時代の須恵器窯跡1基が発見された。遺跡の

ある南佐久地域では初めての事例である。出土した須恵器も蓋や皿などに偏るが、この須恵器がどこで使われたものかを今後検討し、遺構の性格付けを行う必要がある。馬越下遺跡（佐久穂町）では、小規模な山間地のムラが調査された。堅穴住居跡からは、鎌などの鉄製品や、墨書土器も出土している。

■**鎌倉・室町時代** 1582（天正10）年に消失した旧長命寺跡と目される地家遺跡では、現二王堂へ続く谷間の傾斜地を平坦に造成して建物を配置し、その西側から北側の傾斜面を墓地に利用するという空間構成が明らかとなった。建物は礎石柱や堅穴が中心で、倉庫や御堂の可能性を考えている。一方、墓域には火葬墓、土葬墓のほかに、大型の五輪塔を据えた平坦面が調査された。谷間を流下する溝には人形や下駄などの木製品が廃棄されている。このうち、仏教に関わる言葉の書かれた木簡が出土し、この遺跡の性格を考える上で興味深い。墓域には、テラスを造成した後に、礫を敷き、大型五輪塔を立てたことが調査によって明らかになった。五輪塔は地輪のみが残されていたが、五輪塔の現位置を留める数少ない事例である。現段階では地域の有力者が建立した供養塔的な性格を持つ遺構と考えている。

北裏遺跡群では、中世の堅穴建物跡4軒、井戸跡3基、柱穴を主体とする土坑約500基が検出された。北裏遺跡群内には、望月方面に向かう古くから利用されていた道があり、近隣の「狼煙台」や「砦」との関連を考慮した上で、遺構の性格を捉えてゆく必要がある。

整理作業では、銅戈・銅鐸が発見された柳沢遺跡（中野市）の礫床木棺墓群が、構造や出土遺物の分析から、銅戈・銅鐸と密接な関係をもつ可能性が高まった。

報告書は、千曲市力石条里遺跡群、坂城町上五明水田址を刊行した。

その他自主事業として、（当センターの業務を知っていただく機会として）昨年度に引き続き夏休み期間中に考古学チャレンジ教室を開催した。

Ⅱ 発掘調査の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物
きたうら 北裏	佐久市	中部横断自動車道	8.245	4月5日～ 12月27日	縄文時代：焼土址。弥生時代：竪穴住居跡、礫床、木棺墓、木棺墓、遺物集中、礫集中。弥生～古墳時代：方形周溝墓、円形周溝墓。平安時代：竪穴住居跡。中世：竪穴建物跡、井戸跡、礫集中。弥生～中世：溝跡。縄文～中世：土坑。	縄文時代：土器、石器、槍先形尖頭器。弥生時代：土器、石器、石鍬、装飾品、骨片。平安時代：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、紡錘車。中世：陶磁器、内耳土器、銭貨、井戸杵。
にしひがしやま 西東山			6.590	9月13日～ 12月24日	弥生時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑。不明：溝跡、土坑。	縄文時代：土器、石器。弥生時代：土器、石器、大型蛤刃石斧。
こやまかみ 小山の神B			250 (立会調査)	9月6日～ 12月16日	墓地造成により、削平をうけており、遺構・遺物なし。	なし
ぢけ 地家			10.472	4月5日～ 12月24日	平安時代：竪穴住居跡。古代～中世：焼土址。古代～中近世：土坑。中世：竪穴状遺構、礎石建物跡、掘立柱建物跡、段切造成区画、テラス状平坦部。	縄文時代：土器、石器。弥生時代：土器、石器。平安時代：土師器、須恵器、三彩、鞆羽口、砥石、耳環、鉄滓。中世：青磁、白磁、青白磁、古瀬戸、かわらけ、板碑、五輪塔各部、相輪、銭貨、鉄釘、飾金具、木簡、塔婆、印、人形、人骨。
かみなき なかたき 上滝・中滝・ 下滝			6.100	4月5日～ 11月17日	縄文時代：竪穴住居跡、土坑。古墳時代：竪穴住居跡。平安時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡。	縄文時代：土器、石器、玦状耳飾。古墳時代：土師器。平安時代：土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、土錘、羽口、炉壁。
やうら 家浦			5.600	7月20日～ 11月30日	古代：遺物散布地、ほ場整備により削平されており、遺構なし。	古代：土師器、須恵器。
わだ 和田 わだこうかん 和田1号墳			2.500	10月20日～ 11月30日	確認調査。弥生時代：竪穴住居跡。	弥生時代：土器。 中世：青磁。
おくひかげ 奥日影	佐久穂町		9.420	4月5日～ 11月25日	古代：窯跡。古代～中世：土坑。中世：掘立柱建物跡。中近世：溝跡。	縄文時代：黒曜石剥片。古代～近世：土器、陶磁器、銭貨、キセル。
こやまてらくぼ 小山寺窪			4.220	5月10日～ 12月17日	縄文時代：土坑。古代～中世：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡。中近世：水田跡。	縄文時代：土器。平安時代：土師器、須恵器。中近世：陶磁器。
まこえした 馬越下			8.830	4月5日～ 8月4日	平安時代：竪穴住居跡、土坑、不明遺構。不明：焼土跡。	縄文時代：土器、石器。平安時代：土師器、須恵器、鎌、刀子。

(1) 北裏遺跡群

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市伴野北裏ほか

中部横断自動車道佐久南 IC から南西約0.2km。

遺跡の立地環境：千曲川及び千曲川に注ぐ片貝川左岸の低地から段丘上にかけて立地する。今年度の調査は段丘上（標高660～670m前後）にあたる。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.4.5～12.27	8,245㎡	谷和隆 白沢勝彦 寺澤政俊 曳地隆元 鈴木時夫

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	38	弥生、平安
竪穴建物跡	4	中世
礫床木棺墓	2	弥生
方形周溝墓	8	弥生～古墳前期
円形周溝墓	1	弥生
木棺墓	1	弥生
掘立柱建物跡	1	弥生？
井戸跡	3	中世
溝跡	9	弥生～中近世
焼土址	2	縄文
遺物集中	4	弥生
礫集中	5	弥生、中世
不明遺構	1	不明
土坑	700	縄文～中世 中世主体

佐久平南縁の台地上下に広がる重複遺跡

調査区は遺跡を北北東－南南西方向に約500mの長さで横断して貫いている。北から1～5の調査区を設定した（図4）。平成19年度に1区、平成21年度に2区発掘調査を実施している。縄文土器や弥生土器の散布があったが、遺構は確認されなかった。

今年度は3～5区の約300mの区間の発掘調査



図2 北裏遺跡群の位置（1:50,000小諸）

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文（前期～中期）、弥生（中期～後期）、平安（土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器）、中世（陶磁器・内耳土器）
石器類	縄文（草創期槍先形尖頭器、石鏃、打製石斧、石匙）、弥生（打製石鏃、磨製石鏃、打製石斧、磨製石斧、管玉、ガラス小玉）
金属製品類	平安（紡錘車）、中近世（銭貨）
木製品類	中世（井戸枠）
骨製品類	弥生（装飾品）、獣骨、弥生（骨片）



図3 北裏遺跡群遠景

に着手し、3区と5区の記録保存のための発掘調査が終了した。その結果、縄文時代から近世に至る遺構・遺物が多数検出された。

4区の本格的な調査は次年度以降に行う予定である。

弥生時代後期のムラ

3区から弥生時代の竪穴住居跡25軒が検出された。3区は遺構検出面が地表から30～50cmと浅く、



図4 北裏遺跡群の調査区

大部分が畑地であった。検出面が床面や床下と考えられる竪穴住居跡も複数あったことから、耕作により破壊された竪穴住居跡のため、検出数より多くの竪穴住居跡が存在したと考えられる。

竪穴住居跡の分布の北限は段丘崖であり、南限は段丘崖から50m程度となっている。東西の広がり、調査区の東端から西端まで途切れることなく竪穴住居跡が分布することから、調査区外に大きく広がることが予想される。千曲川左岸としては大規模な集落となる。

南端を除く3区全体に弥生時代中期～後期の遺物が多く包含しているが、床面や炉跡等から検出される遺物から時期が特定できる竪穴住居跡はいずれも後期である。

弥生文化の墓

3区には弥生時代中期～古墳時代前期に属す複数種類の墓が検出された。墓の分布は竪穴住居跡群とほぼ重なっている。



図5 礫床木棺墓の調査

3区中央付近で2基の礫床木棺墓が近接して検出された。いずれも礫床部の下に小口痕が確認された。礫の間や礫床下部の土器片は弥生時代中期の土器片が目立つが、時期を特定できるような遺物出土状況はなかった。

3区東端付近で2基の方形周溝墓が検出されている。方形周溝4隅の4か所が途切れるタイプであり、同種の方形周溝墓が調査区外東側に広がる可能性が考えられる。主体部は耕作により破壊されており、周溝からの遺物も少なく時期の特定が難しい。

3区の中央から西側にかけて6基の方形周溝墓が検出された。内3基は周溝南辺の中央1ヶ所に開口部を持つタイプで、1辺が20m弱と古墳のような規模を持つ。主体部は耕作により破壊されている。周溝の幅は1～2mで掘り込みはなだらかで、狭い場所や浅い場所があり規模が一定ではない。また、周溝内側より外側の開口が広い。周溝



図6 方形周溝墓

底部1か所より古墳時代前期の土器底部が検出されている。また、弥生時代後期の竪穴住居跡を切り合いはいずれも周溝が切り勝っていることから、弥生時代後期以降古墳時代前期までの時期に属すと考えられる。3区の西約300mに位置する竹田峰遺跡からは同種の方形周溝墓が検出されている。竹田峯遺跡までは同一地形が続くことから、方形周溝墓群が連なる可能性も考えられる。

残り3基は南辺中央に開口部を持つタイプより、溝幅が狭く、2基は4隅1ヶ所に開口部を持つことが確認できる。同様に主体部は破壊されており、周溝から完形土器が出土することもないため、時期の特定が難しい。

5区の東端から1基の木棺墓が検出されている(図7)。東西を長軸とする長さ150cm、幅55cmの木棺で一部が炭化して残っている。木棺内部には焼土ブロックが入り込んでおり、その上から弥生



図7 木棺墓

時代後期の完形の甕、壺、台付壺、高杯、小型の壺、鉢が出土している。木棺内部からガラス小玉1点が検出されたが、今後、木棺内部の土の水洗選別により玉類等が増加する可能性がある。小口痕及び掘り方も確認された。

この木棺墓の周辺には4か所の土器集中が検出されている。壺や鉢等の赤く塗られた小型の土器を中心とする完形土器が並べられており、木棺墓に関連する祭祀が行われていた可能性が考えられる。

古代・中世の北裏遺跡群

3区では13軒の平安時代の竪穴住居跡が検出された。分布域は弥生時代の竪穴住居跡とほぼ重なり、東西の調査区外にも広がると考えられる。

段丘崖から50m~100mの位置にあたる3区南部では、中世の竪穴建物跡4軒、井戸跡3基、柱穴を主体とする土坑約500基が検出された。3区と4区の境とした県道は、望月方面に向かう道として古くから利用されていて、近隣の「狼煙台」や「砦」との関連を考慮した上で、遺構の性格を捉えてゆく必要がある。

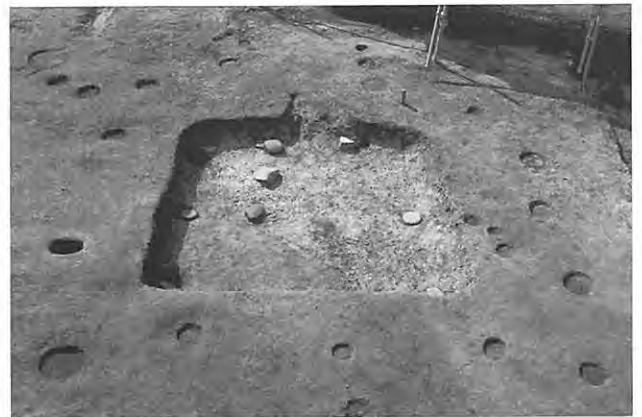


図8 中世竪穴建物跡

(2) にしひがしやまいせき 西東山遺跡

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市伴野

国道142号線、下平入口交差点の南約500m

遺跡の立地環境：八ヶ岳東縁の台地上

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.9.13～ 12.24	6,590㎡	上田真 清水梨代 寺沢政俊 藤原直人

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	9	弥生
掘立柱建物跡	2	弥生
土坑	70	弥生・不明
溝	2	不明



図9 西東山遺跡の位置 (1:50,000小諸)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文～弥生
石器	縄文(石鏃)、弥生(太型蛤刃石斧)

台地上の弥生時代後期の集落跡

西東山遺跡は、八ヶ岳東縁の丘陵が、北流して千曲川に注ぐ東の片貝川と西の中沢川に浸食され残った台地上に立地する。調査区は、この台地の中央を縦断しており、地形によって、北側の平地から台地上に上がる急斜面(1区)、台地上の緩斜



図10 遺跡全景

面（2区）、そこから1段下がった浅い谷（3区）の3地区に分けられる。検出された遺構は上表のとおりである。

1区は急斜面であるが、造成により、細かく見ると傾斜が急と緩を繰り返す3つの段が見られる。北側に隣接する北裏遺跡群の用地を通過してここに着くのが調査区への唯一の進入路であり、廃土の搬出や、2・3区への登坂道を作る必要から、先行して調査を行った。傾斜地のため、遺構は少なかったが、土坑3基が検出されたほか、北西部では斜面を垂直に下って北裏遺跡群用地内に続く幅約1mの溝（1号溝）が見られた。また、最下段のテラス面には、黒色シルト質土の堆積があり、多量の弥生時代後期の土器が出土した。

台地上の2区は、深さ20~30cmの表土下が直接固い岩盤となっていたり、重機の爪痕が残っていたりと、近年に削平された跡が見られた。当初は遺構が残っていないかと思われたが、ひな壇状に削平された地山の落ち際など、比較的削平の少なかった所に遺構が残っていた。弥生時代後期の竪穴住居跡9軒、同掘立柱建物跡2棟、弥生時代及び時期不明の土坑約60基など、今回検出された遺構のほとんどがこの地区で検出された。202~204号住居跡の3軒、206・209号住居跡の2軒が切り合い、削平以前には住居跡が密集していたことが窺える。残った住居跡はどれも検出面から床面までの深さは極浅く、出土した遺物は少なく、残りも悪い。その中で、201号掘立柱建物跡の柱穴からは、大型壺の内側に折り返した口縁の破片が出



図11 2区201号掘立柱建物跡

土しており注目される。

3区は、黒色シルト質土が谷の中央部で厚く、斜面部で薄く凸レンズ状に堆積しており、1区のテラス面と同様に多量の弥生時代後期の土器が出土したが、遺構は土坑が8基検出されたのみである。

以上のことから、台地部の2区に弥生時代後期の集落跡があり、土場の浸食とともに、そこから斜面下の1区や、谷部の3区に遺物が流れ込んだものと考えている。北側の斜面下には同時代の集落・墓群跡の北裏遺跡群が隣接しており、台地の上下に存在した両遺跡の関係について、関心がもたれる。



図12 2区202・203・204号住居跡



図13 3区遺物包含層掘り下げ作業

(3) 小山の神B遺跡

(中部横断自動車道関係)

所在地及び交通案内：佐久市小宮山布替戸

県道145号線の小宮山入口から南西へ約1 km

遺跡の立地環境：蓼科山麓から東に延びる低丘陵の南斜面（小宮山川の左岸）

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.9.6~12.16	250㎡	藤原直人 清水梨代

検出遺構

なし

出土遺物

なし

墓地移転に伴う遺跡の確認調査

今回の調査は、中部横断自動車道用地内の墓地移転に伴い、墓地内を深さ2 mまで掘削する（「佐久市墓地等の経営の許可等に関する条例1—第6条」による墓地廃止申請）ことから、当該地の立会調査を2回に分けて行った。

当該墓地は土葬墓であったが、昭和50年代にそれらの遺骨を迦陵塔（かろうとう）内に移骨しているため、墓地内は著しく破壊されていることが



図14 小山の神B遺跡の位置（1:50,000小諸）

予想されていた。しかし、当時の掘削地点や詳細が不明なことから、包蔵地の残存状況によっては1～2週間の記録保存を実施する予定で調査にのぞんだ。

墓地内の表土を重機により段階的に掘下げた結果、約5～20cm下で遺構確認の可能性のある黄褐色土が観察されたが、黄褐色土からは、ガラス片などが出土していることから後世の遺骨移転の際に攪拌されたことが判明した。西寄りの地区では、表土直下で黄褐色土はみられず、下層に堆積している暗褐色土が露出していたことから、黄褐色土は削平されたものと考えられる。暗褐色土からは遺構・遺物は確認されなかった。

以上のことから、今回の調査区内では、削平や攪拌が著しいため、遺構・遺物が存在していたかどうかは不明である。



図15 調査状況

(4) ちけいせき 地家遺跡

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市大沢地家ほか

国道141号線本新町交差点から西約1.3km。

遺跡の立地環境：佐久平南部を見下ろす東向きの山裾傾斜地に立地する。標高705～725m。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.4.5～12.24	10.472㎡	若林卓 中野亮一 内堀団 大澤泰智

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	7	平安
竪穴状遺構	1	中世
掘立柱建物跡	1	中世
段切造成区画	3	中世(建物建造域)
テラス状平坦部	11	中世(墓域)
焼土址	2	古代～中世
土坑	124	古代～中近世

佐久平西縁の山裾に造営された中世寺院

遺跡内の地形は、西から東に向かって伸びる二筋の尾根と、それに抱かれた谷部からなり、その比高は約20mを測る。

遺跡一帯は旧長命寺の比定地である。『佐久市志歴史編2 中世』(1993)によれば、長命寺は、寛平五年(893 平安時代)に開創され、天正十年(1582 戦国時代)に兵火で焼失、元禄十年(1697 江戸時代)に、遺跡南東約1kmの現在地に再建されたという。

発掘調査地の東約100mに、旧長命寺の仁王門跡地に建立したと伝えられる二王堂があり、その堂中に「應永廿二年乙未七月四日宗阿敬白」の銘文を刻んだ石柱が納められている。応永二十二年は、1415年(室町時代)にあたる。

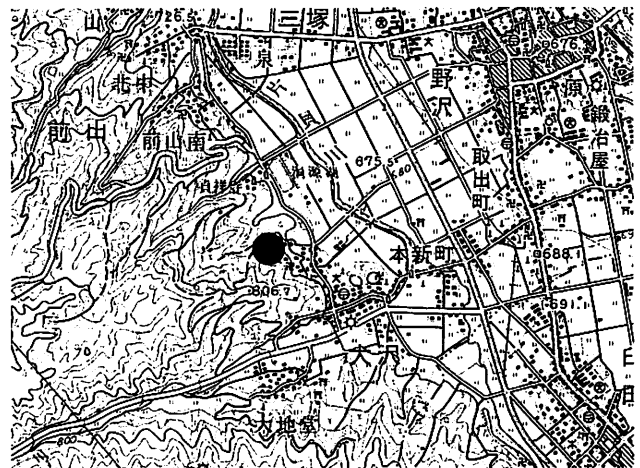


図16 地家遺跡の位置 (1:50,000白田)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文(早・前・後・晩期)、弥生(前、後期)、古代(土師器、須恵器、三彩)、中世(青磁、白磁、青白磁、古瀬戸、かわらけ)
土製品	平安(鞆羽口)
石器・石製品	縄文～弥生(石鏃、打製石斧、剥片)、平安(砥石)
石造物	中世(板碑、五輪塔各部、相輪)
金属製品	平安(耳環、鉄滓)、中世(銭貨、鉄釘、飾金具ほか)
木製品	中世(木簡、塔婆、印、人形ほか)
骨	中世(人骨)

発掘調査は、この旧長命寺跡を確認することを中心課題として、昨年および本年度に実施した。昨年度の調査では、北側の尾根頂部から斜面にかけて中世の墓群が確認され、板碑や多数の五輪塔が出土した。また谷底部では中世の竪穴状遺構や礎石建物跡が見つかった。

本年度は、南側の尾根斜面(南斜面)から谷底部を主体に調査を行い、南斜面部で中世の墓地、谷底部で中世の掘立柱建物跡が捉えられた。

南斜面部では奥行1～2mのテラス状平坦部が9箇所検出された。テラスとその周辺で火葬骨を納めた納骨ピットが確認されたほか、広い範囲で火葬骨片が検出されており、南斜面に墓地が営まれていたことは明らかである。比較的遺存状況が良好な3箇所のテラスでは、テラス面に石を敷詰



図17 五輪塔を造立したテラス状平坦部（テラス7 北から撮影）

め、その上に五輪塔を造立した状況が捉えられた。

とくに、斜面部の中央に位置するテラス7(図17)は、石敷内に区画石列をもち、その内部に、梵字を刻んだ大型の地輪(一辺50cm、高さ40cm)が並ぶ。残存するのは2基であるが、区画内の東端にもう1基分の余地があり、実際、同型同大で同石材の地輪が斜面下方から出土しているので、本来、3基が並列していたことは確実とみてよい。地輪の梵字は、北面に𑖀(アク)、東面に𑖀(ア)、南面に𑖀(アー)が深く刻まれている。西面には認められない。テラス7の大型五輪塔は、位置や形態、下部構造の入念さからみて、南斜面に展開する墓地全体の中心であり、墓地形成の端緒となる構築物として評価し得るものであろう。

テラス7は、東西幅13mほどの規模を有するが、石敷は、東側約8mの部分に施されており、西側5mの部分には確認されなかった。この石敷の認められない西側部分で納骨ピットが検出された。一方、石敷部下では、区画石列内の中央やや東寄り、東西140・南北80cmほどの長方形の坑を検出した。人骨や埋納品は確認されず、その性格は

明確ではないが、上部の大型五輪塔と関連する施設であろう。

なお、人骨や礫、原位置を保つ石造物の出土はみられないものの、西斜面北部でも同様な形状のテラス状平坦部がみついている。

五輪塔は、南斜面部および西斜面北部から昨年度を上回る530点が出土した。原位置を留める例はごく限られるが、本来、テラス上に立っていたものと考えてよいであろう。なお、4点の相輪が出土しており、宝篋印塔などの五輪塔でない石塔の存在も明確になった。

板碑は、斜面部および谷底部から、多くの破片が出土した。原位置を留める例はない。小破片の状態で検出されたものが多く、全体の形状を推測し得るものはごく少ないが、幅30cm程度と幅20cm程度の、大小2種は認められる。西斜面の北部に、量的にも大形破片も集中することから、その周辺(斜面上方)に板碑を集中して造立する箇所があった可能性も考えられる。

中世の建物跡は、谷底部の緩斜面を段切りして平坦に造成した区画内につくられており、軸をほ

ぼ東西・南北に取る。昨年度は、礎石建物と壁際に石を並べた竪穴状遺構を検出した。本年度は、新たに3×3間(ST02、総柱)および1×1間の掘立柱建物がみつかった。その他、柱穴様の土坑も多く検出されている。

総柱建物 ST02(図18)は、主屋の北側に庇を付けた構造と推測される。柱間寸法は東西・南北とも2.1mほどである。底部分は柱間寸法の約半分を外に出す。柱穴には礎石または礎板を伴う例が認められる。

掘立柱建物と礎石建物・竪穴状遺構は、いずれも鎌倉時代に属すると考えられるが、礎石建物の建築に伴う造成層にST02が覆われるため、ST02は礎石建物より古い。従って、建物群が少なくとも2時期に分かれることは確実である。



図18 掘立柱建物跡(西から撮影)

谷最底部には、西から東に流れる幅5~10mの自然流路跡が確認された。流路跡からは、13世紀~14世紀前半の中世陶磁器とともに木製品が出土している。木製品は、建築部材や端材と思われるものや生活用具に加え、塔婆・人形などの仏教関連あるいは呪いの性格をもつものが目を引く。

なかでも、縦11.7・横4.3・厚さ0.9cmの板の片面に、現時点で「百劫種相三十二六度満足」と判読できる11文字を墨書した木簡(図19)が特筆される。また、花菱紋の印影をもつ木製印が確認された。縦3.2・横4.5cmの印面には墨の付着が観察される。現長命寺の寺紋が花菱であることは興味深い。現寺紋の使用開始がいつまで遡るか不明であり、短絡的な判断は避けねばならないが、注意



図19 木簡の出土状況

すべき遺物といえよう。

今回の発掘調査では、東に開ける谷口の緩斜面を造成した平坦地に、礎石建物・総柱建物などの建物跡が確認された。建物群の背後を取り囲む斜面には石塔や板碑を伴う墓地が展開する。建物周囲や隣接する流路跡から出土した中世焼物に占める中国産陶磁器の割合は高く、また、上記の木簡をはじめ、木製塔婆や五輪塔・板碑といった仏教関連遺物の出土が特徴的である。

こうした遺跡内容からみて、検出した中世建物群は一般集落とは考え難い。伝承と合わせ、鎌倉時代の旧長命寺の一部であると理解する。そして、当時の伽藍全体の中心は、今回調査部分の東方に存在していたと推測する。

室町時代以降の建物跡は確認されなかったが、五輪塔の形態からみて、墓地が存続していることは確かなので、寺もまた同様と思われる。一方、開創とされる平安時代については、寺院の存在を示す資料はみつかっていない。

明らかにならなかった点や、残された課題も多いが、今回の調査は、佐久地域における中世寺院の在り方を考える上で貴重な事例となろう。

かみたき なかたき しもたき いせき
(5) 上滝・中滝・下滝遺跡

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市湯原

国道142号線、下小田切交差点の西約1km

遺跡の立地環境：滝川左岸の河岸段丘上

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.4.5～11.17	6,100㎡	上田真 清水梨代 鶴田典昭 広瀬昭弘 藤原直人

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	20	縄文、古墳、奈良・平安
掘立柱建物跡	1	奈良・平安
土坑	70	縄文、奈良・平安、不明
溝	2	古代、不明

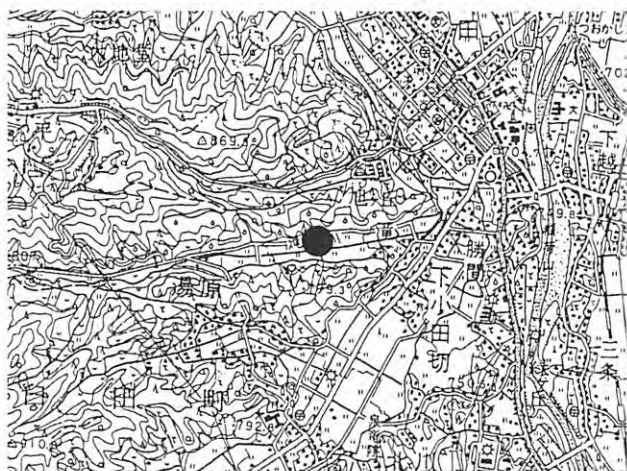


図20 上滝・中滝・下滝遺跡の位置 (1:50,000小諸)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	縄文、古墳～平安 (土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器)
土製品	土錘、羽口、炉壁
石器	縄文 (石鏃、石匙、玦状耳飾)

複数時期の集落遺跡

上滝・中滝・下滝遺跡は、千曲川の支流、滝川左岸の河岸段丘上に東西に細長く伸びる遺跡である。今回その中央付近を中部横断自動車道が横断



図21 上滝・中滝・下滝遺跡調査区全景

することとなり、調査を行った。一昨年度は市道U54号線と滝川の水田部分の確認調査を行ったが、元々滝川の氾濫原であることと圃場整備で土壌が攪拌されていることが判明し、遺構・遺物は検出はされなかった。しかしながら、一方、地元住民への聞き取り調査で、市道北側のりんご畑の部分は、昔の土器がよく出土するとのことであった。今年度は、そのりんご畑部分の調査を行った。検出された遺構は上表のとおりで、縄文、古墳と平安時代の大きく分けて3時期の集落遺跡であることが明らかになった。

調査の経過

調査は昨年度の3月より開始した。農道や段により区画された旧地割りから、調査区を1～4区に分け、トレンチを入れて、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、最上部の3区では耕作土の直下が岩盤であり、遺構は検出されなかったが、その他の1・2区では、疎らなものほぼ全面に遺構が分布することが明らかとなった。このため、1・2区を全面調査することとなったが、確認調査のみとなった3区は狭小なうえに傾斜地で土を盛りにくく、道を挟んだ調査区南西部の一昨年度調査区に、表土を盛ることとした。

その後、6月中旬から4区の全面の調査を行った。

検出された遺構と遺物

縄文時代のものは、2区東端で前期と思われる203号住居跡、4区中央で中期初頭の401号住居跡の2軒の住居跡の他、1区西部で、土器片と黒曜石が多数出土し、2.8×1.9mと大型の20号土坑がある。住居跡2軒はいずれも上部を削平されてい

るうえ、401号住居跡は、平安時代の402号住居跡に中央の大部分を切られているが、401号住居跡に切られてない部分で深鉢形土器の口縁部が出土している。

古墳時代の遺構は、前期の住居跡が1区と2区で各1軒検出されている。1区の1号住居跡は焼失住居跡で、床面から建築部材が炭化したものが多数出土している。2区の203号住居跡では、S字状口縁の甕が出土している。

奈良・平安時代の遺構は、1・2・4区から複数の竪穴住居跡が検出されている他、1・4区を東西に貫通している1号溝がある。2・6号住居跡、4・5・207号住居跡、201・202号住居跡、208・209号住居跡など古代の住居跡同士で切り合う例が多く、出土遺物にも時期差があり、継続して集落が営まれていたことが知られる。特に2区北部の201・202号住居跡は、石組のカマドを持ち、灰釉陶器碗の他、緑釉陶器香炉片が出土しており、この地方の有力者の住居と思われる。

古代の住居跡や土坑、溝からは、この他に土錘、羽口、炉壁、底面の亀裂や口縁歪みが見られる須恵器杯・碗などが出土しており、それぞれ、漁労、製鉄、須恵器生産との関わりを窺わせる。また、1号溝は滝川に平行に走り、この時期盛んになる墾田との関係も考えられる。



図22 1号住居跡



図23 201・202号住居跡

(6) 和田遺跡 和田1号墳

(中部横断自動車道関係)

所在地及び交通案内：佐久市湯原

国道141号線の下小田切の交差点を左折し、南西に約1.5kmの丘陵上

遺跡の立地環境：蓼科山麓から東に伸びる低丘陵上、標高は750~770mを測る。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.10.20~ 11.30	12,960㎡	藤原直人 清水梨代

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	3	弥生(遺構確認のみ)

確認調査でみつかった弥生時代集落跡

和田遺跡は、2009年度に佐久市教育委員会によって本調査区の西側隣接地で調査が行われ、弥生時代の4軒の竪穴住居跡が調査されている。

調査区は東西に伸びる尾根上に位置し、やや急峻な北側斜面と馬の背状の尾根部、やや緩やかな南側斜面部に分けることが出来る。また、南側斜面部はその中腹を東西方向に農道が走りその上部はやや急であるのに対し農道より下の傾斜は比較



図25 遺跡全景



図24 和田遺跡の位置 (1:50,000小諸)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生、中世(青磁)

的緩やかである。

今回の確認調査では、佐久市教育委員会が遺構を検出した南側斜面の農道寄りを中心にトレンチを設定し、掘削した。その結果、標高745m付近の比較的傾斜の緩やかな南西斜面で竪穴住居跡が合計で3箇所確認できた。検出された覆土からは弥生時代後期の土器片が数点出土している。

北側斜面・尾根部・農道上部の南斜面では、遺構の見落としがないうようにトレンチの間隔を極力狭く設定し調査したが、遺構・遺物は確認されていない。よって今回の調査から農道の南側斜面部では来年度以降の本調査が必要と判断している。

また、本調査区内の尾根上には未調査のため詳細は不明であるが、和田1号墳が存在する。古墳の詳細については来年度以降の本調査に委ねたい。



図26 遺構検出状況

(7) やうらいせき 家浦遺跡

(中部横断自動車道関係)

所在地及び交通案内：佐久市湯原

国道141号線の下小田切の交差点を左折し南西に約1.1km

遺跡の立地環境：蓼科山麓から東に伸びる低丘陵に囲まれた沖積地、標高は720～725mを測る。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.7.20～ 11.30	5,600㎡	藤原直人 清水梨代

検出遺構

遺構の種類	数	時期
なし		

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	平安(土師器、須恵器)

沖積地に残された縄文時代から中世の足跡

家浦遺跡は佐久市南西部、湯原地区の中沢川右岸に所在する。一帯は、通称「小田切の谷」と呼ばれる蓼科山麓の低丘陵に囲まれた沖積地である。遺跡の範囲は中沢川右岸に沿って北東から南西に伸びている。周辺の現状は、宅地・果樹畑・水田となっている。

本調査区の東約10m付近では、佐久市教育委員会が2007、2009年度に調査を行っている。この調査では、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺物(土器・陶器・石器)とともにピット65基と溝状遺構2条が検出されている。

今回の調査対象地は、一昨年度(2008年度)に埋文センターにより確認調査を行った地区の東側にあたる。一昨年同様、まず、トレンチ調査(一部拡張)を実施し、地下の状況を確認した。その結果、調査対象地南東側の土層では、上から現耕

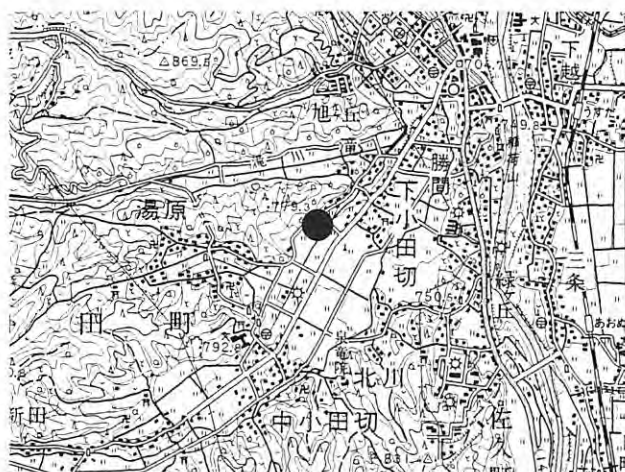


図27 家浦遺跡の位置(1:50,000小諸)

作土・暗褐色土(層厚15～50cmの客土層)・黄褐色土・砂礫が堆積している。黄褐色土が残存している箇所については、遺構の存否を確認するためトレンチを拡張したが、遺構・遺物は確認されなかった。

東側では黒褐色土が検出され、土器片が数点出土した。黒褐色土中には小礫が多量に混入し、自然流路と考えられる。この層は上部が土地改良のため削平を受け部分的に残存したと判断した。

北西側では、上層から現耕作土・シルト(旧水田層)・砂礫が堆積しており、砂礫の層厚は2m以上認められていることから、中沢川の旧河道、あるいはそれに伴う氾濫原の低地と考えられる。以上の状況から、今回の調査対象地については面的調査の必要はないものと判断される。



図28 調査区全景

おくひかげいせき (8) 奥日影遺跡

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久穂町高野町1869-1ほか。国道141号線千曲病院入口を西へ800m。

遺跡の立地環境：八ヶ岳東麓、千曲川支流北沢川右岸段丘端とその崖および崖錐。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.4.5～11.25	9,950㎡	川崎保 古賀弘一 太田潤

検出遺構

遺構の種類	数	時期
掘立柱建物跡	1	中世
窯跡	1	古代
土坑	約200	古代～中世(柱穴群、柵列なども含む)
溝跡	20	中世～近世

遺跡がある八ヶ岳東麓の台地は、火山性堆積物に広く覆われているが、千曲川の支流により、東西に浸食されている。とくに奥日影遺跡はその河岸段丘の北端およびその段丘崖に位置する(図29)。



図29 奥日影遺跡の位置 (1:50,000蓼科山)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古代(土師器、須恵器杯・蓋・皿・甕)、中世(土師質土器、陶磁器)
石器	黒曜石剥片
金属製品	中近世(銭貨)、キセル

調査の経過

平成20年度に、当初県教委が設定した遺跡の調査範囲(1区)を調査し、中世に属すると思われる掘立柱建物跡2基や柱穴群、溝跡などが検出された。その結果21年度に県教委が遺跡隣接地の試掘調査を行い、遺跡の範囲が南側に伸びることが確認された。本年度は、拡張された部分(2区)を調査した(図30)。

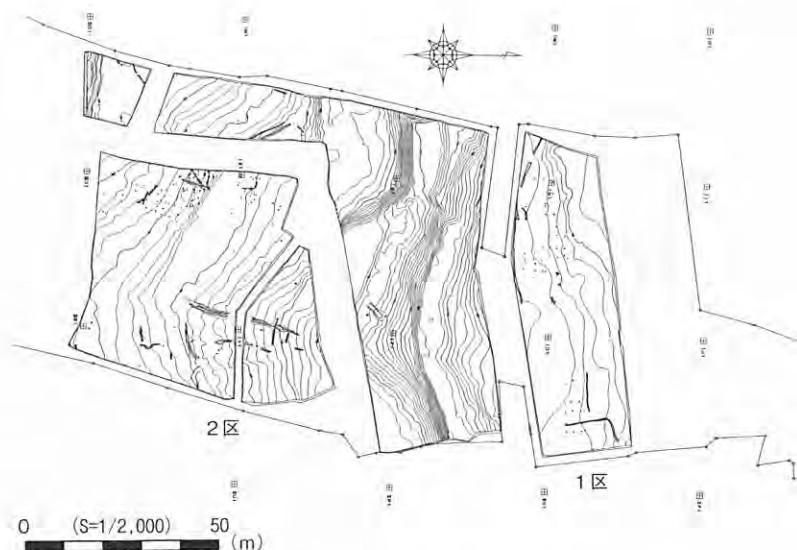


図30 奥日影遺跡の調査区及び遺構配置 (1/2,000)

南佐久ではめずらしい古代須恵器窯

遺構は、20年度同様に、主に中世に属すると思われる掘立柱建物跡、杭列や柵跡と思われる小土坑群や溝が検出されているが、1基だけではあるが古代の須恵器窯跡（SK222）が検出された（図31）。

須恵器窯跡の規模は、全長5.8m（焼成部3.5m、燃焼部2.3m）、焼成部幅1m、燃焼部幅2.5m、最大深0.8mで、河丘崖の急斜面にあり、焚き口は北東方向を向いていた。窯体の側壁や天井部が崩落したままの部分が出検されたが、焼成部は山側（南西方向）に上がっていくほど、深さが浅くなっていた（写真31の手前）。自然による土砂の崩壊や後世の土地利用によってかなり削平されているものと思われる。

須恵器窯は全長10mを越えるものもあり、奥日影遺跡の須恵器窯は規模として大きい方ではない。さらに、すでに述べたような後世の削平の結果なのかあるいはもともと生産地には残さず消費地に搬出されてしまったためなのか、この窯で焼かれた須恵器自体もコンテナ2箱ほどとそれほど多

くはない。しかし、窯体に溶着した須恵器片や高温によって焼かれて歪んでしまったため廃棄されたとと思われる須恵器など生産地ならではの資料もあった。

また、須恵器の器種や形態からおよそ奈良時代ぐらいに操業していた須恵器窯であると推定されるが、須恵器窯跡としては小型の部類にはいることやつまみのない蓋や胴部で屈曲する有段の皿など比較的小型の特徴的な器種が多い。こうしたことから須恵器の器種をまんべんなく多量に焼成するというよりは、特定の消費地あるいは目的のために特定の器種を焼いていた可能性を考えてもよいだろう。

今後、この窯で焼かれたと思われる製品が当該期の佐久地方をはじめとする集落遺跡内に含まれていないか調べるとともに、この地点付近にこれ以外にも須恵器窯跡がないか留意する必要があるだろう。



図31 崩落した窯体が残っていた須恵器窯 SK222（南西側の河岸段丘上端部分から撮影）

こやまてらくぼいせき (9) 小山寺窪遺跡

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久穂町高野町2037-1ほか。国道141号線千曲病院入口を西へ800m。

遺跡の立地環境：八ヶ岳東麓、千曲川支流北沢川右岸段丘上の小丘陵の裾野

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.5.10~12.2	4,220㎡	川崎保 古賀弘一 太田潤

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物・住居跡	10	古代 中世
掘立柱建物跡	4	古代~中世
土坑	約460	古代~中世(柱穴群、柵列なども含む)
溝跡	12	古代~中世

南佐久八ヶ岳東麓の古代・中世の集落

遺跡がある八ヶ岳東麓の台地は、火山性堆積物に広く覆われているが、千曲川の支流により、東西に浸食されている(図32)。

同一台地の南側斜面、今回の調査区の西へ30mほど上った地点で、町教委が平成13年に調査を行

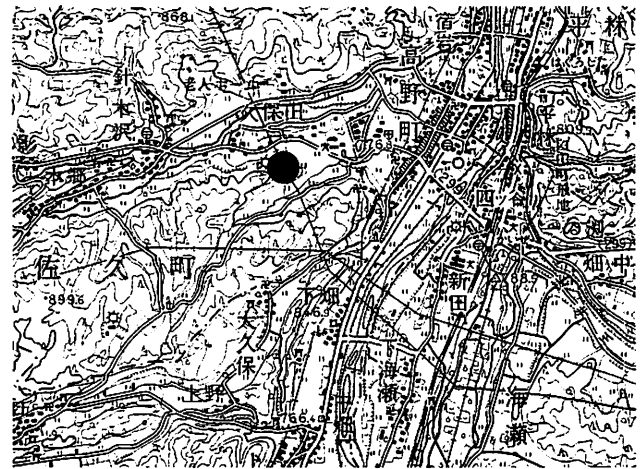


図32 小山寺窪遺跡の位置 (1:50,000蓼科山)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古代(土師器坏・甕、須恵器坏・甕、黒色土器坏・鉢・皿・盤)、中世(施釉陶器、青磁)
石器・石製品	石鏃、中世(砥石、五輪塔片)
金属製品	中近世(銭貨、キセル)

い、中世五輪塔群が出土している。

平成20年度は、東側の1区を、21年度は引き続いてその北側の2区や南側の3区を調査した。本年度は1区や2区の一部、5・6区を調査している(図33)。

遺構は、昨年度同様に、南向きの緩斜面に竪穴住居跡や掘立柱建物跡、杭列や柵跡と思われる小土坑群やこれらを区画するように溝が検出されている。

遺物は、縄文時代の石鏃なども出土しているが、古代(10世紀頃)以降の遺物が多い。とくに本年

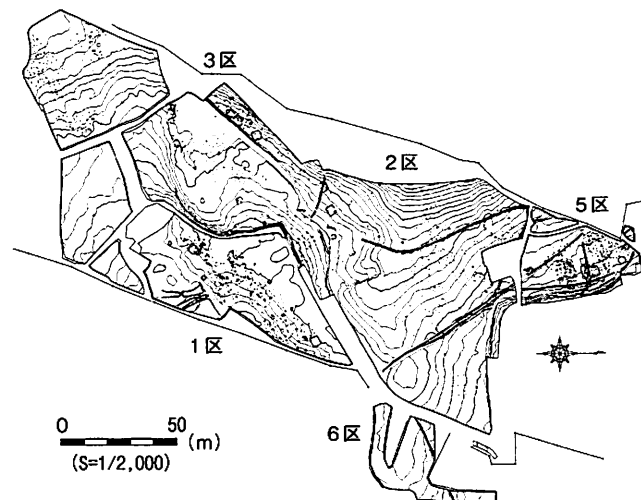


図33 小山寺窪遺跡の調査区及び遺構配置 (1/2,000)

度は、中近世の遺物が多く、白磁や青磁、在地の土師質土器、陶磁器などが出土している。

主な遺構として、古代は、2区と3区を分断する農道下の部分からカマドをもつ平安時代中期の竪穴住居跡が検出されている。

中世は、カマドなどの火処はないが、地面を掘り下げて床面を作り、柱穴をめぐる竪穴建物跡（図34）や掘立柱と溝をともなう小竪穴がセットになった建物跡がある（図35）。

いずれも柱穴はあるが、火処がないので、人間の居住用というよりは、馬小屋などの用途を考えるべきかもしれない。

また、径が2mを越え、深さが遺構検出面から1.5m程度もある竪穴も検出された。井戸枠などは見つからないが、基盤の粘土層に到達していることから井戸跡と考えられる。

この他、こうした中世の遺構を区画するように大溝がめぐる（図36）が、溝の外側からは遺構が検出されていない。よって、集落の範囲を区画するための溝であったと考えられる。

今までの調査で南佐久の山間地にも古代・中世集落が広がっていたことが明らかになってきたといえよう。



図34 中世の竪穴建物跡（写真手前 SB20、奥 SB21）



図35 排水溝をともなう竪穴（SB23）



図36 中世遺構群と集落を区画する溝
（写真右上の遺構群を切るように見える溝は古代のもの。5区北側から撮影）

まごえしたいせき (10) 馬越下遺跡

(中部横断自動車道関係)

所在地及び交通案内：佐久穂町大字千代里

国道141号線の清水交差点を西南西に約1km

遺跡の立地環境：八ヶ岳から東に伸びる尾根末端部の河岸段丘上、標高は850～860mを測る。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
22.4.5～8.4	8,830㎡	藤原直人 太田潤 清水梨代

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴住居址	3	平安
焼土跡	5	不明(一部平安時代?)
土坑	15	平安

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・石器	縄文、平安(土師器、須恵器、灰釉陶器)
鉄製品	平安

山間部にみつかった小規模なムラ

遺跡の立地は、甲武信岳を源流とする千曲川と
 麦草峠おおいしに源を持つ大石川の合流点から南西に1km
 程の尾根末端部の河岸段丘上にある。

遺跡は、一昨年の県教育委員会の試掘調査によ



図37 馬越下遺跡の位置 (1:15,000蓼科山)

り、新たに登録された遺跡である。

遺跡の性格は、標高の高い山間部に存在する古代の小規模なムラという位置付けができる。

調査区は、尾根上の小さな谷間にあり、谷部と緩やかな斜面部に分けられる。谷部は砂礫主体層で、遺構は検出されなかった。斜面部では平安時代の竪穴住居址3軒・焼土跡5基が検出された。また縄文時代中期後半と晩期頃の土器や石器が数点出土している。竪穴住居址からは土師器、灰釉陶器、内黒土器、墨書土器や鉄製品の鎌・刀子が出土している。鎌は長さ20cm、幅4cm、厚さ0.2cmで、住居址の壁際で出土した。刀子は長さ9.5cm、幅1.3cm、厚さ0.2cmで、カマド近くの床上で出土している。『南佐久郡誌』(平成10年)では、標高900m以上の稲作に不向きな条件に立地する遺跡を「高地遺跡」と記し、水田耕作に向かないものの、畑作や狩猟、植物採集、炭焼き、木製品製作等の生業を基とする暮らしを想定している。



図38 遺構の検出作業



図39 住居跡掘下げ作業



図40 馬越下遺跡遠景 遠く南西方向にハケ岳連峰を望む

馬越下遺跡は、このような「高地遺跡」的な性格のムラである可能性が考えられる。

佐久穂町より南の千曲川上流の地域では、鉄製品や灰釉陶器、墨書土器を出土する平安時代の遺跡が数ヶ所知られている。古代の南佐久地域の流通や暮らしを支える生産のありようについて、これらの遺跡と平地に展開する平安時代の遺跡との

比較検討する必要がある。

また、当時の律令制度の中で「高地遺跡」がどのような原因で発生したのか、佐久地域だけでなく、県内の他地域の事例、あるいは、他県の様相とも比較し、律令社会の中での「高地遺跡」の位置付けを研究し解明しなければならない。



図41 住居跡から出土した墨書土器



図42 住居跡から出土した鉄製鎌

Ⅲ 本格整理作業遺跡一覧

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
千田	中野市	千曲川替佐・柳沢築堤	縄文土器接合・分類・集計、抽出土器台帳作成、遺構2次原図作成、石器実測委託	本文参照
川久保・宮沖			土器接合、分類、集計、復元、2次原図作成、遺物計測、表入力	本文参照
柳沢			弥生土器実測、弥生遺構図デジタルトレス、青銅器保存修復	本文参照
南曾峯	長野市	北陸新幹線	遺構2次原図作成、遺構図トレス、遺物選別・接合、遺物実測・拓本、遺構実測図トレス、図版版組、原稿執筆、写真撮影	2枚の文化層に区分され、上層石器群が1,817点、下層が555点である。上層は二側縁加工のナイフ形石器と搔器、下層は横長剥片を素材としたナイフ形石器を含む。これらの多くは黒曜石で、上層は和田鷹山群、下層は諏訪星ヶ台群が主体を占める。接合資料が41例を確認した。
沢田鍋土	中野市		遺物注記委託	—
峯謡坂	千曲市	一般国道18号 坂城更埴バイパス	遺物分類、観察表作成、接合、復元、実測、写真撮影、トレス、版組、原稿作成。遺構図面修正、デジタルトレス、計測、版組、原稿執筆	本文参照
東中曾根				
西中曾根				
東條				
井戸端ほか	飯田市	飯喬道路	全体図・遺構トレス、遺物の分類・接合・選別・復元・実測・トレス、写真撮影、原稿執筆	本文参照
力石条里	千曲市	(主) 長野上田線 (力石バイパス)	報告書刊行	本文参照
上五明条里 水田址	坂城町		報告書刊行	本文参照
近津ほか	佐久市	中部横断自動車道	遺構図点検・修正、仮図版作成、遺物点検、分類、選別	浅間山麓の田切り台地に立地する遺跡で、古墳前期と平安後期を主とする。古墳前期は、近津遺跡群と隣接する鎌田原遺跡とで時期差がありそうである。
西近津			遺構図修正、デジタルトレス、遺物選別・接合、復元、実測	本文参照
西一里塚ほか			遺構図デジタルトレス、土器実測、拓本、木器実測、遺物実測図トレス	260余の木器出土。佐久地方では事例の少ない弥生時代の鍬身、鍬柄がみつかると。

(1) 柳沢遺跡・千田遺跡・川久保遺跡・宮沖遺跡

(千曲川替佐・柳沢築堤関連)

千田遺跡

縄文土器と集落変遷 遺跡は中野市(旧豊田村)豊津に所在する。J R飯山線替佐駅付近から千曲川の間に広がる集落遺跡である。平成14・15・17・18・19年度に発掘調査した。今年度は、縄文中期の竪穴住居跡53軒を検出した8区の縄文土器すべての分類・集計・抽出が済み、復元を行っている。竪穴住居跡の時期別内訳は、遺物がなく時期がはっきりしない住居を除いて、縄文前期後葉(諸磯b式期)1軒、中期中葉(大木8a式期)8軒、中期後葉(大木8b式期)36軒、中期末葉(大木9式期)3軒となった。

中期中葉の住居跡は、切り合いのため全般に遺存状態が良くないが、平面卵形で間仕切り溝をもつものが1軒ある。炉は地床炉と埋甕炉がある。

土器は粘土紐貼り付けと半割竹管による半隆起線で隙間なく文様を描いた、火焰型土器の仲間が装飾的な土器の主体を占め、新旧がある。これらには白色胎土と褐色胎土の二種がある。地文に縄文を施し沈線文を描く土器と、縄文のみの土器が少数伴う。千曲川上流域に主体的に分布する焼町土器はかなり少数である。

後葉期の竪穴住居跡は、平面円形と楕円気味の形態で、壁際を1段高く掘り残したベッド状遺構をもつものと、ないものがある。炉はコの字形で火床を掘り込まないもの、小形礫を用いた長方形・方形炉などがあり、新潟県に見られる竪穴住居跡と共通の特徴を備えたものが多い。

後葉期でもっとも古い段階には、東北地方南部の大木8b式とほとんど変わらない土器と新潟県の土器が伴う。次に柝倉式と呼ばれる、口縁部に立体的な渦巻文を組み合わせた把手をもち、胴部に粘土紐貼り付けによる腕骨文が展開し、綾杉文・半隆起線文・沈線文・条線文などを地文に施す土器が現れる。この段階の住居跡が最も多く、切り合いも認められるため、細分できる可能性がある。次に柝倉式土器に伴って関東地方の加曾利

EⅢ式や、長野県の唐草文系土器のうち樽形深鉢が伴う段階となる。後葉段階を通じて圧痕を施す隆帯が口縁部にめぐる縄文地文の土器や、縄文・条線文・無文の中・大形土器が多数伴っている。

末葉には4枚の大形礫を埋めた方形石囲炉と埋甕を備えた敷石住居跡が現れ、加曾利EⅢ式のやや新しい土器が優勢となり、集落は途絶える。

これまで知られた新潟県の事例より多様なタイプがそろい、復元個体が多く住居単位にまとまることから調理・貯蔵具としての土器の組み合わせが把握できる重要な調査例と言える。また中期中・後葉期に属す火焰型土器と、県内では初めて王冠型土器がそれぞれ複数個体確認され、火焰型土器分布圏南端の集落として注目される。

多数の土偶 8区から出土した土偶の数は、不明確なものを含めて200点近い。平成14・18年度調査地点の出土品を加えると200点を上回っている。完形品は1個体もなく、住居跡の埋土中や、廃棄場と思われる地点から出土している。

1遺跡の土偶数は松本市エリ穴遺跡(後・晩期)の360点以上が現在長野県最多と思われるが、千田遺跡はこれに次ぐ数である。板状土偶に属するものが多く、この点も新潟県と共通する。



図43 縄文時代中期 深鉢

川久保・宮沖遺跡

川久保・宮沖遺跡は中野市豊津に所在する。両遺跡は斑尾川と千曲川合流地点付近に隣り合っており、類似した遺跡内容でもあるのでまとめて記述する。発掘調査は平成16～19年に実施し、弥生時代から中近世に至るさまざまな耕作遺構や居住遺構が見つかった。二つの遺跡は川に面した立地環境により、厚い堆積土によって遺構検出面が数面に分かれるが、時代毎の河川の影響のあり方の違いも窺えて興味深い。

発掘調査で採取された土器・石製品などの遺物はテン箱398箱あり、本年度から遺物の接合・観察・分類・計測・復元作業を中心に実施した。以下には整理で判明した時代ごとの遺物の特徴を述べる。

弥生中期後半

宮沖・川久保遺跡では縄文時代の土器石器も僅かにみつまっているが、本格的な活動が確認できるのは弥生時代からである。川久保遺跡では千曲川のすぐ脇にある微高地縁で、壺・甕などの土器が集中する地点がいくつか見つかった。土器の遺存状態は良好で、壺を中心として甕が少量、鉢・高杯が僅かに認められる。甕は煤が付着し、煮炊きに使用されたものを用いている。この土器集中の性格は不明だが、土器間には余り時間差は認められず、長期に継続的に営まれたものでないと考えられる。また、同時代の遺跡である柳沢遺跡より本遺跡出土土器のほうが新しく、柳沢遺跡を含めて千曲川沿岸域の弥生中期後半の遺跡動向を考える上で興味深い資料になるとみられる。

古墳時代前期

弥生後期は遺構が希薄な時期だが、古墳時代前期は水田址や土器集中、宮沖遺跡で住居址が認められている。若干の時代幅は認められ、出土土器量は多い。出土した土器は小型丸底、高杯、鉢、ハケ甕、有段・直縁の壺に混じって東海系のS字甕、パレスと思われる壺破片も確認できた。

古墳時代後期～奈良時代

当該期は川久保・宮沖遺跡で最も住居址が広く分布する。本遺跡の中心時期の一つである。住居

址は川久保遺跡の千曲川に近いところまで広がり、当該期は洪水が少ない環境と思われる。古墳時代前期から暫く時間を置いて5世紀後半から土器が確認され、ほぼ奈良時代まで連続する。特筆すべき遺物として奈良時代の円面硯と思われる破片、底にヘラ書きされた須恵器がある。

平安時代

平安時代は住居址を中心に散在的にみつまっている。住居址から出土した土器は9世紀後半～11世紀のものがあり、出土量は少ないながら光ヶ丘1号窯式と思われる灰釉陶器碗、1点だが緑釉陶器碗が確認できた。また、土師器甕は北信に多い砲弾型を中心とするが、口縁の型態は多様で、僅かだが東信地方に多い武蔵型の台付甕も出土している。活発な交流を物語っている。

中世～近世

12世紀後半頃以後は水田址、畑址、墓址、掘立柱建物址、堅穴建物址などさまざまな遺構が遺跡全体に広がる。出土量は少ないが、中世ではカラケや内耳鍋などの県内で生産されたと思われる土器、常滑、珠洲、古瀬戸など国内産陶器、中国産の青磁・白磁碗、近世では唐津、伊万里、瀬戸美濃製品などさまざまな産地のものが認められた。

これからの整理作業

本年度の作業により、遺構年代の確定や遺構別出土土器の種類・量の資料化、遺跡の性格を示す特殊遺物の有無を確認した。今後はこれらの遺物の情報を遺構と併せて資料化し、報告書としてまとめる作業に入る。



図44 川久保遺跡出土の古墳時代土器類

柳沢遺跡

本遺跡は中野市柳沢に所在する。平成18～20（2006～2008）年度に発掘調査が行われた。調査対象面積は19,200㎡におよぶ。青銅器埋納坑と銅鐸5点、銅戈8点を検出して全国的に注目された。

今年度は主に弥生時代の遺構・遺物に関する整理作業を実施した。以下今年度の成果を概観する。
礫床木棺墓埋土の水洗洗浄

昨年度からの継続で礫床木棺墓埋土の水洗選別による遺物採取作業を実施し、全工程を終了した。今年度は新たに管玉7点が発見された。調査段階で出土したものを含めると133点になる（表）。特に1号墓での玉出土数が圧倒的に多い。これは長野県内の同時期の墓1基から出土した管玉の中で最も多い数である。

土器の整理

今年度は縄文時代から近世までの土器接合と弥生時代土器の実測を行った。

弥生時代中期土器は調査区南端の水田跡から北部の自然流路までの間（600m程）で、出土した。総重量は417kg程である。土器の分布には特定の遺構や地区に偏る傾向が認められた。最も土器が多く出土したのは12区（調査区北部）の33号土器集中遺構で、31kg程出土している。33号遺構は長さ240cm、幅170cmを測る。長方形の穴から略完形の壺が10個体以上出土している。さらに33号遺構の周辺でも土器が集中して発見されており、12区の総量は106kg程となる。これに対して礫床木棺墓群周辺（5・6区）の土器総量は21kg程で、略完形土器も少ない。青銅器埋納坑周辺（4区）の土器総量は17kg程で、破片が中心となる。

遺構名	管玉 (緑色凝灰岩)	管玉 (鉄石英)	その他 玉類	計
1号墓	91	10		101
4号墓	1			1
6号墓			1	1
9号墓	27			27
16号墓	3			3
合計	122	10	1	133

礫床木棺墓出土の玉類総数

各遺構から出土した土器型式は石川編年の栗林2式古段階が中心であり（石川2002）、現状では大きな時間幅が存在するとは考えにくい。

青銅器の整理作業

1・2号銅鐸は複数の破片に分かれていたが、昨年度実施した三次元光学計測により形状を復元し、展開図を作成した。この図を基にして、観察所見を加えながら実測を行った。これにより銅鐸の文様構成と法量が推定可能となった。

1号銅鐸は、外縁付鈕1式の流水文銅鐸で、推定器高は22cm程である。鈕の菱環外斜面にはA面に斜線文、B面に綾杉文がある。B面には横帯が確認でき、流水文の一部は端を巻き込んでいる。鱗には外向鋸歯文がある。

2号銅鐸は、外縁付鈕1式の四区袈裟襷文で、推定器高は22cm程である。縦袈裟襷文の横帯と縦帯の界線が一部切りあう。A面の鱗には蕨手文と連続渦文がある。

5号銅鐸については三次元光学計測を委託し、完了した（図45）。

1・2号銅鐸と4～8号銅戈は奈良文化財研究所でICP分析を実施、完了後に長野県埋蔵文化財センターにおいて保存処理を実施した。

参考文献：石川日出志2002「栗林式土器の形成過程」『長野県考古学会誌』99・100



図45 5号銅鐸の3次元光学計測

(2) 東條遺跡ほか

(国道18号坂城更埴バイパス関連)

平成20年度から本格整理作業に着手し、今年度は、報告書刊行前の整理作業最終年にあたる。整理対象遺跡と整理内容は以下のとおりである。

整理対象：峯謡坂遺跡、西中曽根遺跡、東中曽根遺跡、東條遺跡

整理内容：4遺跡共通

遺物：分類、観察表作成、接合、復元、実測、写真撮影、トレース、版組、原稿執筆

遺構：図面修正、デジタルトレース、計測、版組、原稿執筆

記録保存の対象となった4つの遺跡の考古学的内容については、以下のとおりである。

峯謡坂遺跡（竪穴27軒・掘立1棟ほか）

遺跡は姨捨土石流が千曲川方向に尾根状に突き出た台地先端部付近に立地する。7世紀後半から11世紀ころまでの集落遺跡と考えられ、中心となる時期は7世紀後半、8世紀末～9世紀である。調査区内のみの所見ではあるが、8世紀代（概ね奈良時代）が欠落する点に特徴がある。各時期とも3～5軒の竪穴式住居跡を確認しており、生産の単位としては小規模な集住である。遺跡全体の規模は未知だが、立地上の最良地を調査しており、それほど大きな生産単位は存在していないらしい。8世紀末から9世紀前半期には、灰釉陶器や緑釉陶器、円面硯（透脚）、須恵器壺G類（細型、花瓶）の出土があり、一般の農民とは別な階級者の居住を想定する必要がある。

西中曽根遺跡（竪穴5軒・掘立2棟ほか）

遺跡は姨捨土石流が千曲川方向に押し出した緩やかな傾斜地の末端部に立地する。4世紀末から5世紀前半まで存続した集落遺跡と考えられる。2～3軒の竪穴式住居跡を、比高差10mほどある高位部と低位部で検出しており、生産単位としては最小規模の集住を確認したことになる。調査地は台地末端部にあたることから、遺跡の中核部分は調査区外に存在しているものと考えられる。

東中曽根遺跡（竪穴13軒・掘立4棟ほか）

遺跡は、西中曽根遺跡と同様な位置、標高に立地し、西中曽根遺跡と宝祿沢川を挟んだ東側の対岸にある。2世紀末から3世紀前半ころまでの集落遺跡と考えられ、弥生時代後期後半から古墳時代前期に相当する。弥生期の集落は、大型竪穴式住居跡（一辺9m規模）1軒を中心に、その東西に生産の単位（2～3軒の住居跡のまとまり）を配した構造である。古墳前期の集落は、竪穴式住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟で構成された生産の単位を確認している。

東條遺跡（竪穴82軒・掘立33棟ほか）

遺跡は姨捨土石流が千曲川方向に押し出した緩やかな傾斜地の末端部に立地する。7世紀から9世紀ころの古代、13世紀から16世紀ころの中世に営まれた集落遺跡と考えられる。それぞれ中心となる時期は7世紀～8世紀前半、13・15世紀である。古代集落は、律令国家体制への過渡期に設営され、その盛行期には集落規模を縮小していく様態を示す。また中世集落は、鎌倉・室町幕府下の地方都市に開かれた社寺門前町、交通の要所として整備された街道等を髣髴とさせる遺構群で、漆器や櫛、下駄、銭などの日用品のほか、呪いの札（「迷故三界城～」）、「蘇民将来符」木簡などの出土があり、特筆される。

次年度は、発掘調査報告書印刷の業務を行い、記録保存の措置として残された記録類の保管の措置を進める予定である。



図46 保存修復された漆器

(3) 力石条里遺跡群・上五明条里水田址

(県道長野上田線力石バイパス関連)

力石バイパス関連では標記の2遺跡について、報告書作成のための整理作業を昨年度から進めており、3月にそれぞれの遺跡の報告書を刊行した。今年度の主な作業内容は、全体図・遺構トレース図の作成、遺物の実測・トレース・台帳作成・写真撮影、図版組・原稿執筆、報告書の編集作業などである。

力石条里遺跡群 遺跡は千曲川左岸の沖積地に位置する。遺跡の時代は弥生時代前期末～中世までの複合遺跡である。

遺跡からは、弥生時代前期末～中期中葉の墓跡が多数みつかり、その墓域にあたる地区からはたくさんの土器や石器がみつかり、出土した土器は、その多くが在地で作られた土器であるが、中には、貝殻を使って条痕を施した東海地方の土器や、さらに西の地方で盛行した遠賀川系土器の影響を受けたと思われる土器の破片も出土している。

また、遺跡からは弥生時代後期の集落跡もみつかり、堅穴住居跡から出土した土器は、在地の土器である箱清水式の土器であるが、中には、北陸地方の影響を受けた土器や、群馬県の樽式に相当する土器なども出土している。

このような事から、弥生時代を通して、人々がさまざまな地域の人々と交流していた様子を考える上で貴重な資料となる。

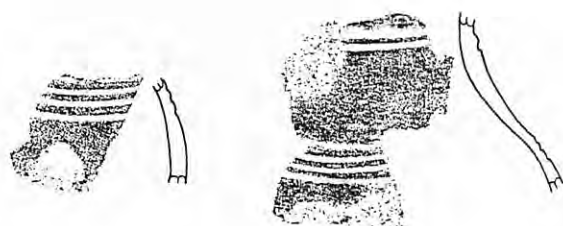


図47 遠賀川系土器の影響を受けた土器片 (S=1/3)

上五明条里水田跡 遺跡は千曲川左岸の沖積地に位置する。遺跡の時代は弥生時代後期から中世までの複合遺跡である。

遺跡からは平安時代の集落跡がみつかり、堅穴住居跡が52軒、墓3基などが確認されている。平成19年には、墓の中から鉄鐸がまとまって出土し、平成20年には、堅穴住居跡からも鉄鐸がまとまってみつかり、遺跡からは、その他にも、紡錘車などの鉄製品や、鉄滓・羽口・炉壁・砥石などの鍛冶関連の遺物がたくさん出土しており、集落の性格や生業について考える上で貴重な資料となった。

整理作業の過程で行われた金属製品のクリーニング作業によって、錆で厚く覆われて塊となっていた鉄鐸も、それぞれの形状がわかるようになった。その結果、11世紀前半の堅穴住居跡からまとまって出土した鉄鐸は、鉄鐸6個と舌1本、銅製の鈴1個であることが分かった。銅製の鈴は、径3cmの球形に近い形状で、中には珠も残っており、振ると微かに鈴の音が聞こえる。また、10世紀後半の墓からまとまって出土した鉄鐸は、鉄鐸9個と舌1本になることが分かった。



図48 堅穴住居跡からまとまって出土した金属製品・石製品 (左上が銅製の鈴)

(4) 西近津遺跡群

(中部横断自動車道関連)

今年度の整理 調査は平成18～20年度の3年間行った。対象面積23,950㎡には縄文～鎌倉時代までの竪穴住居跡605軒をはじめとする多くの遺構が重複し、出土遺物は約1,400箱、40万点余を数えた。本格的な整理作業は21年度から実施し、報告書刊行を平成25年度に予定している。今年度は弥生時代の整理を進めた。

弥生時代の大溝 調査区中央付近で19年度に発見された弥生時代後期の大規模な溝跡(SD4006)の性格について、現時点での所見を記す(図50)。

溝は多くの遺構と同様、浅間第一軽石流上面で平面形状を確認した。他の遺構と重複する部分にはトレンチ調査などを付加し、正確な形状と遺構間の前後関係の把握に努めた。その結果、すでに埋没した弥生時代後期の竪穴住居跡4軒を壊して掘削されていることが明らかになった。

溝の形状と大きさ 溝はほぼ東西方向に延びる。長さは調査区内だけで64mあり、両側の畑地下に延びることは間違いない。溝の底面はほぼ平坦で、検出面とほぼ同じ勾配で東から西へ緩やかに傾斜する。断面形状は通して逆台形で、その規模は上端幅3.2～3.4m、下端幅1.7～1.8m、深さ0.97～1.24mである(図50①)。

堆積状況の観察 堆積時期は大きく3段階に分かれる。まず底部壁際には地山起因の黄褐色シルト(11・12層)が薄く堆積する。次に土壌化した褐色シルト(6～10層)が厚く堆積している。最後に東側からの自然流水が埋土を浸食し、そこに砂層土や砂質シルト(1～5層)を残している。下位2段階の土質は竪穴住居跡のそれとよく似ていて、周囲の土が段階的に埋没していったと考えられる。こうした状況から溝は水路としての機能は持たないこと、またある期間、開口した状態を維持していたと推測する(図50④)。

小型赤彩土器 溝全体にわたって、2段階目の埋土から弥生時代後期の土器が多数出土した。完形の個体は少ないが、いずれも磨滅はなく、ある程

度の固まりを保って出土している。土器の器種分類と接合作業を進めると、小型赤彩土器が目立つ。重量割合でみると、溝埋土の総土器量のうち小型赤彩土器は10%を占めている。因みに土器を多量出土した住居跡(SB4002)では、小型赤彩土器は0.8%しかない。他の住居跡でも同程度の割合と考えられ、溝からの小型赤彩土器の出土割合が極めて突出している。器種は壺、甕、高坏、鉢があり、いずれも住居跡から出土する一般的な土器の4分の1以下の大きさであるが、形や文様は丁寧に整えられ、赤く磨かれている(図49)。

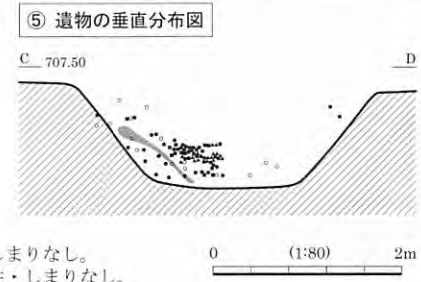
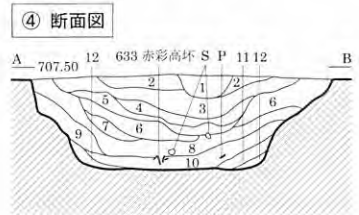
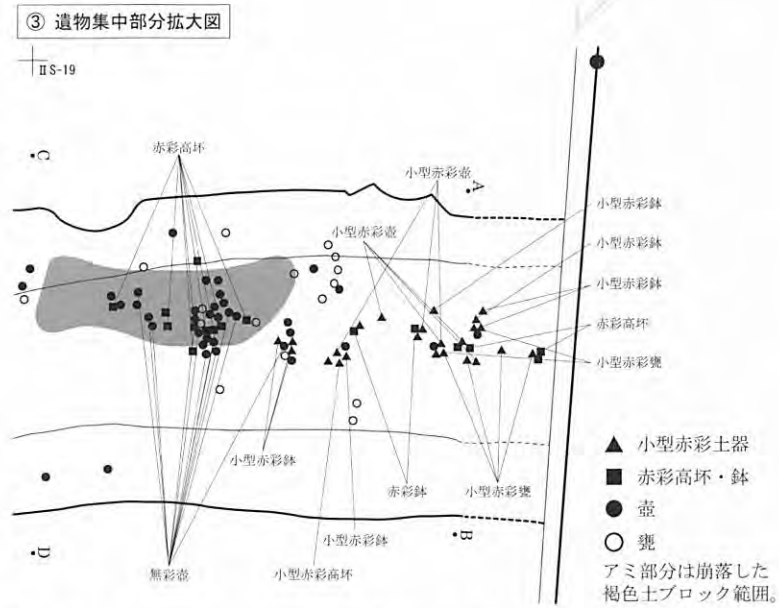
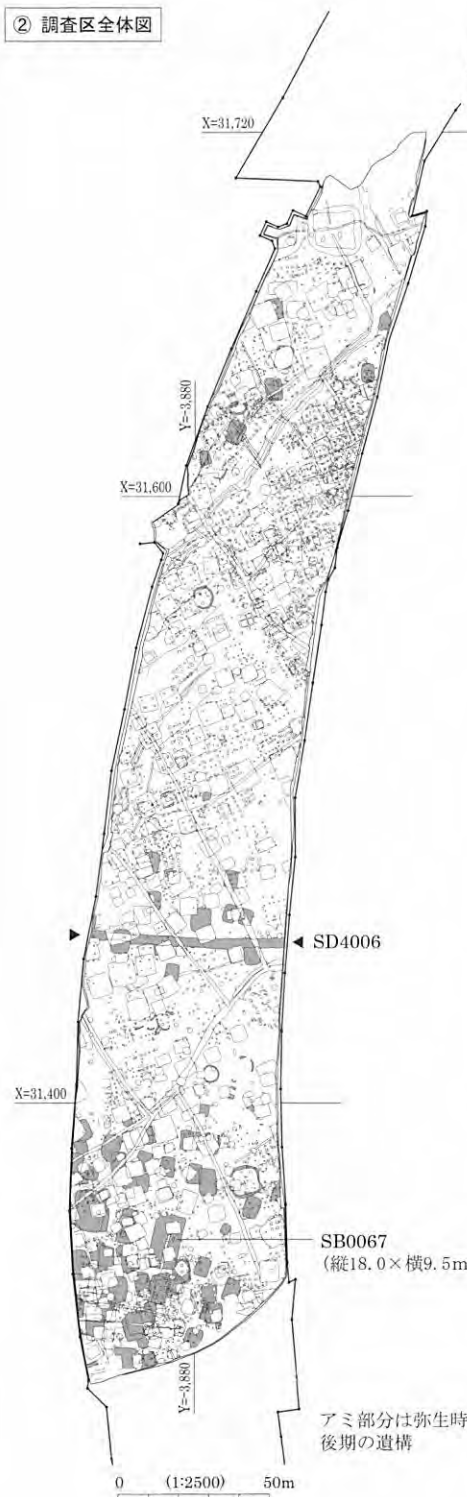
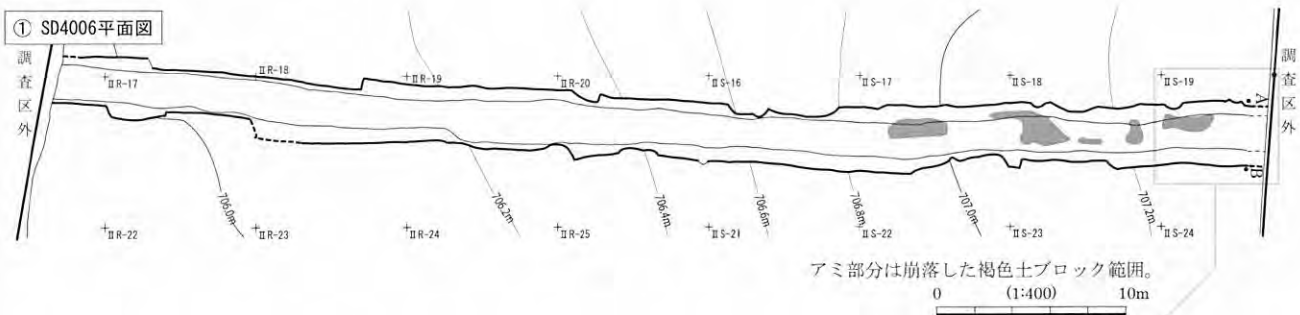
褐色土ブロック 溝の東側では広範囲にわたって、地山主体の褐色土ブロックが北側から溝内部に向かって堆積している。そして、褐色土ブロックより上位に小型赤彩土器が分布する特徴がある(図50③・⑤)。こうした状況は「掘削した土を溝北側の肩部に堤状に積み上げていた。またその付近では小型赤彩土器を用いた祭祀行為が執り行われていた。」というような当時の様子一案を思考させる。

溝の役割 この溝の南100mには縦18.0×横9.5m規模の超大型竪穴住居跡が位置する(図50②)。土器様相や遺構の重複関係から溝と超大型竪穴住居跡は共存していた可能性がある。当初の集落空間を断つように設計された直線的な大溝は、果して未調査範囲でどのような規模と形態で広がっていくのか。大型竪穴住居跡を中心とする集落を区画する役割を担っていた可能性もある。



図49 大溝(SD4006)出土の小型赤彩土器

(右の壺：高さ17.2cm)



- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR6/2) | 砂質土。粘性・しまりなし。 |
| 2 灰黄褐色 (10YR5/2) | 砂質シルト。粘性・しまりなし。 |
| 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 砂質シルト。粘性・しまりなし。 |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂質シルト。粘性・しまりなし。 |
| 5 にぶい黄褐色 (10YR6/4) | 砂質シルト。粘性なし。しまり弱。 |
| 6 暗褐色 (10YR3/4) | シルト。粘性・しまり弱。 |
| 7 褐色 (10YR4/4) | シルト。粘性・しまり弱。 |
| 8 暗褐色 (10YR3/3) | シルト。粘性・しまり弱。 |
| 9 褐色 (10YR4/4) | シルト。粘性・しまり弱。 |
| 10 褐色 (10YR4/6) | シルト。粘性なし。しまり弱。 |
| 11 にぶい黄褐色 (10YR4/3) | シルト。粘性・しまり弱。 |
| 12 灰黄褐色 (10YR4/2) | 砂質シルト。粘性・しまりなし。 |

⑥ 堆積状況



図50 SD4006の調査状況

(5) 下村遺跡(鶯ヶ城跡)・井戸端遺跡・鬼釜遺跡
(国道474号飯喬道路関連)

井戸端遺跡は平成18・19年度、下村遺跡(鶯ヶ城跡)は平成19～21年度、芦ノ口遺跡は平成20・21年度、鬼釜遺跡は平成21年度に発掘調査を行った。今年度はこれらの遺跡について、報告書作成のための整理作業を実施した。来年度報告書を刊行する井戸端遺跡、下村遺跡(鶯ヶ城跡)、芦ノ口遺跡の主な作業内容は、全体図・遺構トレース、遺物の分類・接合・選別・復元・実測・トレース・写真撮影、計測、台帳作成、原稿執筆等である。

下村遺跡(鶯ヶ城跡) 3年間の調査で確認された遺構・遺物を照合し、遺跡の全体像を把握することに努めた。ここでは中世の様相について紹介する。

遺跡が立地する尾根は、2時期にわたって利用されていることが確認された。第1段階(15世紀後半以前)は、墓域として利用される。墓域は土坑墓を基本として構成されており、崖を後にもつ状態で尾根の先端部に展開していたと考えられる。第2段階(15世紀後半～16世紀後半)は、墓坑を破壊して城郭を構築した段階で、尾根全域が城域として利用される。15世紀後半を境として、尾根の土地利用は墓域から城へと変遷した。

井戸端遺跡 ここでは中世の遺構について紹介する。調査区は天竜川を臨む傾斜地で、その傾斜地を削平して平坦部をつくり、そこに掘立柱建物跡や排水機能をもつ溝が構築されている。この平坦部は、広範囲に及ぶ平坦部で掘立柱建物跡がブロック状に点在するものと、比較的狭小の平坦部で掘立柱建物跡が隣接して配置するものがある。前者は居住空間、後者は何らかの作業場に解釈される。井戸端遺跡には傾斜地を削平してつくり出した平坦部が複数存在することから、これらが集合して集落を構成していたと推定される。天竜川左岸(竜東)において集落内の空間利用が明らかとなった貴重な事例である。

天竜川左岸の城とムラ 下村遺跡(鶯ヶ城跡)の城郭遺構は15世紀後半～16世紀後半、井戸端遺跡の平坦部は16世紀に比定されるが、両者が同時に存在したことは証明されていない。ただし、中世後半(15・16世紀)という時間幅で考えると、城とその眼下に集落(ムラ)が点在する景観を彷彿することができる。

鶯ヶ城跡は小規模城郭であるため、築城主体者として在地の小領主が想定され、さらに在地との深い関わりを持って存続したことが推定される。井戸端遺跡は、この小領主の屋敷地もしくは民衆の生活空間であったと推定される。

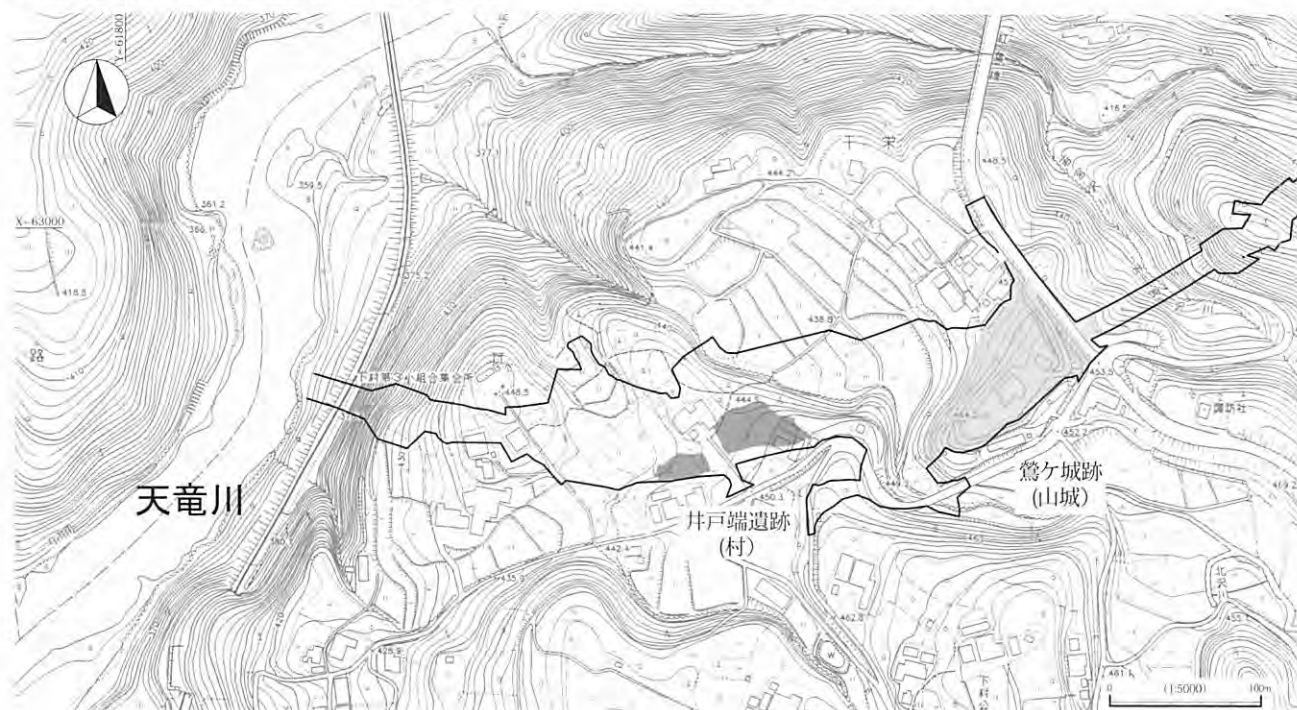


図51 天竜川左岸の城と村

IV 普及公開活動の概要

(1) 展示会・講演会

① 長野県埋蔵文化財センター速報展 「長野県の遺跡発掘2010」

<長野県立歴史館会場>

会 期:平成22年3月13日(土)～5月9日(日)

来館者:7,853名

内 容:五輪塔・板碑・四耳壺等が出土した地家遺跡をはじめ、平成22年度の調査・整理遺跡のうち11遺跡の展示を行った。

遺跡調査報告会 3月14日(日)

遺跡報告 地家遺跡他3遺跡と遺跡トーク

個別遺跡報告に加え、座談会形式の遺跡トークも実施した。

聴講者98名

講演会:4月25日(日)

演 題:「信濃の青銅器と倭国の政治」

講 師:水野正好大阪府文化財センター理事長

聴講者181名



図52 水野先生講演風景

<長野県伊那文化会館会場>

会 期:平成22年7月6日(木)～8月1日(日)

来館者:1,329名

内 容:国内最古級の旧石器が出土した飯田市竹佐中原遺跡も特別展示することとし、計12遺跡の展示を行った。

遺跡調査報告会 7月11日(日)

遺跡報告 竹佐中原遺跡他3遺跡と遺跡トーク

聴講者60名



図53 伊那文化会館での遺跡トーク

② 「写真でみる長野県の遺跡発掘2011」

会 場:しなの鉄道屋代駅 千曲市民ギャラリー

内 容:速報展のプレイベントと位置づけ、屋代駅構内で写真パネルを中心とした展示を行った。今年度より長野県立歴史館と主催し、千曲市教委の共催を得て実施することとなった。



図54 屋代駅市民ギャラリーでの展示

③ 長野県埋蔵文化財センター速報展 「長野県の遺跡発掘2011」

会 場:長野県立歴史館会場

会 期:平成23年3月12日(土)～5月15日(日)

内 容:今年度の調査・整理遺跡のうち、19遺跡の資料を展示した。

遺跡調査報告会 3月19日(日)

遺跡報告 北裏遺跡群他2遺跡と遺跡トーク

聴講者62名

(2) 現地説明会

県教育委員会との共催事業として、6遺跡で実施した。参加者は延べ550名であった。

① 北裏遺跡群（佐久市）

6月19日（土）151名 晴

弥生時代から古墳時代にかけての、方形周溝墓などと住居跡を中心に見学いただいた。前日までの雨で、遺跡内の一部公開となったが、多くの参加があり、熱心に説明を聞く風景がみられた。



図55 遺構の説明を熱心に聞き入る参加者（北裏遺跡群）

② 上滝・中滝・下滝遺跡（佐久市）

6月19日（土）99名 晴

平安時代の住居跡等を紹介した。北裏遺跡群と同日開催とし、一日で2遺跡の説明会に参加できて、良い企画との声もいただいた。

③ 馬越下遺跡（佐久穂町）

6月26日（土）58名 雨

小雨の中、地元の方を中心に見学いただいた。古代の山棲み集落としての遺跡を紹介した。関東方面からの参加者もあった。



図56 出土遺物の展示風景（地家遺跡）

④ 小山寺窪遺跡および奥日影遺跡（佐久穂町）

9月11日（土）123名 晴

隣接する両遺跡を紹介した。小山寺窪遺跡では、平安時代から中世にかけての建物跡等を紹介した。奥日影遺跡では奈良時代の須恵器窯跡を見学いただいた。登窯の構造などについて、熱心に質問する姿も見られた。

⑤ 地家遺跡（佐久市）

9月19日（土）119名 晴

中世の寺院跡の調査を主として、建物跡・墓跡や五輪塔・木製品などの見学していただいた。遺跡周辺が旧「長命寺」跡の伝承があり、地元の方の参加も多くみられ、関心の高さが伺えた。

(3) 夏休み考古学チャレンジ教室

8月10日（火）、11日（水）の2日間、昨年度に引き続いて、長野市篠ノ井の施設を公開した。参加者は204名。

今年度は、公開時間を午後3時まで延ばし、遺跡から出土した土器や石器、図面や写真などの記録類の整理作業を見学いただいた。また、県立歴史館の協力を得て、勾玉づくり、銭づくりなどの体験ブースも設置して、参加者に楽しみながら、当センターの業務を知っていただく機会を設けた。

参加者のなかには、夏休みの宿題を当センターの図書室で熱心に学習しているお子さんもみられた。



図57 拓本コーナー（チャレンジ教室）

V 研修等の概要

(1) 講師招聘などによる指導

期 日	所 属	職・氏名	指導内容
4月25日～26日	(財)大阪府文化財センター	理事長 水野正好	柳沢遺跡の青銅器及び礫床木簡墓について
5月19日	明治大学	名誉教授 戸沢充則	竹佐中原遺跡の調査指導について
6月7日	明治大学文学部	教授 石川日出志	北裏遺跡群の調査について
6月10日	文化庁美術学芸課	主任文化財調査官 原田昌幸	柳沢遺跡の青銅器について
6月12日～13日	大学共同利用機関法人 人間文化研究機構	理事 小野正敏	東條遺跡の中世陶磁器について
7月20日～21日	首都大学東京	教授 山田昌久	西一里塚遺跡群、濁り遺跡の出土木製品について
8月4日	長野県考古学会	会長 会田 進	長野県遺跡調査指導委員会
	明治大学研究・ 知財戦略機構	特任教授 小野 昭	長野県遺跡調査指導委員会
	大阪府立狭山池博物館	館長 工楽善通	長野県遺跡調査指導委員会
	長野市文化財保護審議会	委員 笹沢 浩	長野県遺跡調査指導委員会
	早稲田大学文学部	教授 高橋龍三郎	長野県遺跡調査指導委員会
	上伊那考古学会	会長 丸山敏一郎	長野県遺跡調査指導委員会
8月24日～26日 11月29日～12月1日 2月7日～9日	京都大学	名誉教授 茂原信生	東條遺跡ほかの出土骨について 上五明条里水田址の出土骨について 西近津遺跡群の出土骨について
9月13日	奈良文化財研究所	企画調整部長 難波洋三	
10月20日	別府大学	客員教授 宮本長二郎	地家遺跡の建物跡について 北裏遺跡群の建物跡について
10月27日	奈良文化財研究所	企画調整部長 難波洋三	柳沢遺跡の銅鐸の実測指導
	京都国立博物館	保存修理指導室長 村上 隆	柳沢遺跡の青銅器の保存処理について
11月24日～25日	(財)元興寺文化財研究所	研究部長 狭川真一	地家遺跡の出土五輪塔について
11月30日	信州大学理学部	教授 原山 智	下村遺跡(鶯ヶ城跡)出土石器・石製品の石材鑑定
1月29日～30日	新潟県立歴史博物館	学芸課長 寺崎裕助	千田遺跡の縄文土器について
2月8日～9日	総合研究大学院大学	教授 本郷一美	西近津遺跡群の出土骨について
2月24日～25日	長野県遺跡調査指導委員会	会長 笹沢 浩	柳沢遺跡調査指導委員会
	大阪府狭山池博物館	館長 工楽善通	柳沢遺跡調査指導委員会
	京都国立博物館	保存修理指導室長 村上 隆	柳沢遺跡調査指導委員会
	奈良文化財研究所	企画調整部長 難波洋三	柳沢遺跡調査指導委員会
	明治大学文学部	教授 石川日出志	柳沢遺跡調査指導委員会 力石条里遺跡の弥生時代墓制について

期 日	所 属	職・氏名	指 導 内 容
2月24日～25日	信州大学理学部	教授 保柳康一	柳沢遺跡調査指導委員会
	愛媛大学ミュージアム	准教授 吉田 広	柳沢遺跡調査指導委員会

(2) 全埋協等への参加

期 日	会 議 名	開 催 地	参 加 者
4月23日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック春季連絡会	富山市	窪田久雄 大竹憲昭
5月20日～21日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	高野町	阿部精一 大竹憲昭
6月10日～11日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	犬山市	窪田久雄 大竹憲昭 戸谷良子
6月16日	市町村文化財担当者会議	塩尻市	西澤宏明 岡村秀雄 町田勝則 柳沢 亮
7月15日～16日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ等研究委員会	盛岡市	大竹憲昭 岡村秀雄
9月8日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	徳島市	西澤宏明 町田勝則 谷 和隆
10月21日～22日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック秋季連絡会	笛吹市	窪田久雄 窪田秀樹 上田典男
11月11日～12日	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者協同研修協議会	太田市	河西克造
11月19日	考古資料保存処理講習会	千曲市	上田典男 綿田弘実 柳沢 亮
12月2日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	台東区	窪田久雄 大竹憲昭 西澤宏明
12月9日～10日	関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議	宇都宮市	川崎 保
1月21日	市町村埋蔵文化財担当者技術研修会	千曲市	岡村秀雄 綿田弘実 町田勝則 寺澤政俊 藤原直人 鶴田典昭 曳地隆元 櫻井秀雄 川崎 保 清水梨代
2月8日～10日	埋蔵文化財担当職員講習会	大宮区	岡村秀雄 藤原直人 中野亮一

(3) 研修および資料調査

期 日	参加者	場 所	内 容
9月1日～7日	清水梨代	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「古代・中近世瓦調査課程」
9月13日	広田和穂	塩尻市立平出博物館	資料調査（柴宮銅鐸）
9月27日～10月1日	曳地隆元	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「三次元計測課程」
10月18日～26日	鈴木時夫	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「保存科学Ⅱ（有機質遺物）課程」
11月14日～15日	柳沢 亮	山梨県	資料調査（弥生時代後期の土器について）
11月29日～12月3日	内堀 団	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「自然科学的年代決定法課程」
12月10日～11日	柳沢 亮	奈良県	第14回古代官衙・集落研究会「官衙・集落と鉄」
1月17日～21日	柳沢 亮	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「出土文字資料調査課程」
2月15日～23日	太田 潤	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「生物環境調査課程」
1月23日	河西克造	飯田市	資料調査（松島氏所蔵文書等）

(4) 学会・研修会などでの発表

期 日	派遣先	担当者	内 容
5月15日	佐久市大沢地区文化財保存会	若林 卓 中野亮一	「佐久市地家遺跡について」
5月16日	宮城県考古学会	大竹憲昭	「長野県飯田市竹佐中原遺跡の調査研究の成果と課題」
5月18日	中野市立高社中学校	廣田和穂	ふるさと講座「柳沢遺跡から弥生時代を考える」
5月23日	国士舘大学	鶴田典昭	日本考古学協会研究発表「竹佐中原遺跡の発掘調査成果」
		綿田弘実	日本考古学協会研究発表「柳沢遺跡の礫床木棺墓群」
7月17日	長野県立歴史館	町田勝則	考古学講座「石器－製作技術と用途」
7月24日	松本市立考古博物館	川崎 保	あがたの森考古学ゼミナール「時間を計る～考古学からみた時間」
7月30日	長野県高等学校教育文化会議	河西克造	上伊那教育文化会議社会科研修会「伊那市富県一夜城について－織豊期の陣城を訪ねる－」
7月31日	長野県立歴史館	大竹憲昭	夏季展講座「狩猟採集民の死生観」
		町田勝則	夏季展講座「弥生人の死生観－弥生の葬制を考える」
8月29日	上田市立信濃国分寺資料館	大竹憲昭	市民講座「長野県の旧石器文化」
10月23日	塩尻市立平出博物館	綿田弘実	平出博物館土曜サロン「形と文様は交流を語る－縄文土器－」
10月31日	筑北村坂北民俗資料館	柳沢 亮	「東畑遺跡の発掘と縄文土器について」
11月 5日	中野市柳沢区民会館	廣田和穂	「弥生人の生活文化～柳沢遺跡の調査からわかってきたこと～」
1月15日	広島県立歴史博物館	鶴田典昭	考古学学習会「竹佐中原遺跡と日本の旧石器文化について」
1月25日	長野県立歴史館	曳地隆元	平成22年度市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会「3D技術の活用について」
		鶴田典昭	平成22年度市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会「発掘調査報告書作成に関わるデジタル技術の導入について」
2月 6日	飯田市千代公民館	河西克造	「鷲ヶ城の歴史、昨年度の発掘調査」

(5) 市町村・関係機関などへの協力

月 日	依頼元	担当者	協力・指導内容
4月 7日	松本市立考古博物館	白沢勝彦	鍛冶炉の取上げ、保存修復について
5月14日	諏訪市教育委員会	河西克造	武居城跡試掘確認調査現地指導
5月28日	高山村教育委員会	綿田弘実	八幡添遺跡調査指導
6月23日	筑北村教育委員会	柳沢 亮	筑北村民俗資料館（考古資料）の展示及び耐震整備について
6月23日	篠ノ井西部郷土史会	大竹憲昭 廣田和穂	施設見学 報告「柳沢遺跡の青銅器」
7月 9日	(株) 国際交流サービス	綿田弘実 廣田和穂	施設見学 報告「柳沢遺跡の青銅器」
7月29日	長野県教育委員会	岡村秀雄	県宝諮問物件六角木幢・関連遺物の調査について
7月30日	東邦考古学研究会	市川桂子	施設見学
8月29日	東日本古墳出現期の土器検討会	大竹憲昭 西 香子	資料見学
9月21日	福岡市教育委員会	大竹憲昭	資料見学

9月21日～22日	長野県教育委員会	大竹憲昭	重要考古資料日向林B遺跡現地視察の文化庁係官による整理指導に伴う職員の立会について
9月29日	東信史学会	大竹憲昭 西 香子	資料見学（力石遺跡群、上五明条里水田址資料）
10月8日	長野県立歴史館	大竹憲昭	考古学講座遺跡見学会（北裏遺跡群ほか）
10月27日	長野県考古学会	大竹憲昭	施設見学
11月13日	飯田市山本地域づくり委員会	大竹憲昭 鶴田典昭	資料見学（竹佐中原遺跡資料）
11月29日	篠ノ井西部郷土史会	大竹憲昭	施設見学

(6) 学校関係への協力・指導

期 日	学校名	内 容	担当者
6月16日～24日	長野市立通明小学校	体験学習（施設見学）	大竹憲昭
7月26日～27日	長野市立犀塚中学校	職場体験	大竹憲昭
8月24日～25日	麻積村筑北村学校組合立筑北中学校	職場体験	大竹憲昭
8月9日～24日	長野工業高等専門学校	インターンシップ	大竹憲昭
7月6日～7日	長野市立篠ノ井西中学校	職場体験	大竹憲昭
10月13日～14日	長野市立北部中学校	職場体験	大竹憲昭
10月13日～14日	長野市立松代中学校	職場体験	大竹憲昭
10月14日～15日	長野市立篠ノ井東中学校	職場体験	大竹憲昭
3月15日	長野清泉女学院高等学校	ジュニアインターンシップ	大竹憲昭

(7) 資料の貸し出し

貸与先	貸与資料	貸与期間	備 考
長野県立歴史館	竹佐中原遺跡A地点石器接合資料レプリカ	4月17日～3月31日	レプリカ1点
朝日新聞社	柳沢遺跡出土銅戈集合写真	デジタルデータを提供	デジタル写真1枚
(株)新泉社	北方遺跡復元図、吉田川西遺跡復元図、吉田川西遺跡出土近世陶磁器写真、硯と墨書土器写真、鉄鏃・刀装具写真、羽口と鉄滓写真、11世紀の食器写真	掲載許可	図・写真8枚
長野県立歴史館	千田遺跡縄文後期墓写真、地家遺跡中世墓写真	5月25日～6月11日	ブローニーポジ2枚
御代田町浅間縄文ミュージアム	竹佐中原遺跡出土石器	6月3日～6月16日	遺物20点
長井謙治	竹佐中原遺跡出土石器写真	掲載許可	写真一式（日本旧石器学会発表資料）
日本旧石器学会	竹佐中原遺跡出土石器	6月26日～27日	第8回同会実施会場での職員による展示
長野県立歴史館	千田遺跡ほか出土品	7月21日～9月8日	千田遺跡遺物4点 地家遺跡遺物17点 石子原遺跡遺物36点
千曲市森將軍塚古墳館	西近津遺跡群出土品及び写真	8月20日～10月12日 写真は掲載許可	遺物2点 写真1点

貸与先	貸与資料	貸与期間	備 考
千曲市森將軍塚古墳館	西近津遺跡群墨書・刻書土器 写真	メールで提供	墨書6点 刻書3点
飯田市上郷考古博物館	西近津遺跡群墨書・刻書土器 写真	9月18日～11月28日 写真は掲載許可	墨書6点 刻書4点
(株) 小学館	柳沢遺跡青銅器出土状況写真	メールで提供	デジタル写真1枚
(株) 河出書房新社	柳沢遺跡青銅器出土状況写真	メールで提供	デジタル写真1枚
(株) 岩波書店	柳沢遺跡の銅戈・銅鐸埋納坑 写真	掲載許可	デジタル写真1枚
長野上水内教育会	柳沢遺跡出土銅戈および銅鐸 写真	メールで提供	デジタル写真1枚
塩尻市立平出博物館	柳沢遺跡銅戈・銅鐸埋納状態 写真 シカの絵画土器写真ほか	メールで提供	デジタル写真5枚
中野市教育委員会	柳沢遺跡発掘箇所 の平面図 青銅器埋納坑の写真 礫床木棺墓の写真 シカの絵画土器写真ほか	メールで提供	デジタル写真4枚
須坂市教育委員会	清水山窯跡全景写真パネル 清水山窯跡遠景写真パネル 沢田鍋土遺跡写真パネル 遺跡分布図	3月16日～3月31日	パネル展示
(株) 東京法令出版	「赤い土器のクニ」掲載写真 石川条里遺跡出土 鍬の装着 例、又鍬、えぶり	掲載許可	掲載図3点

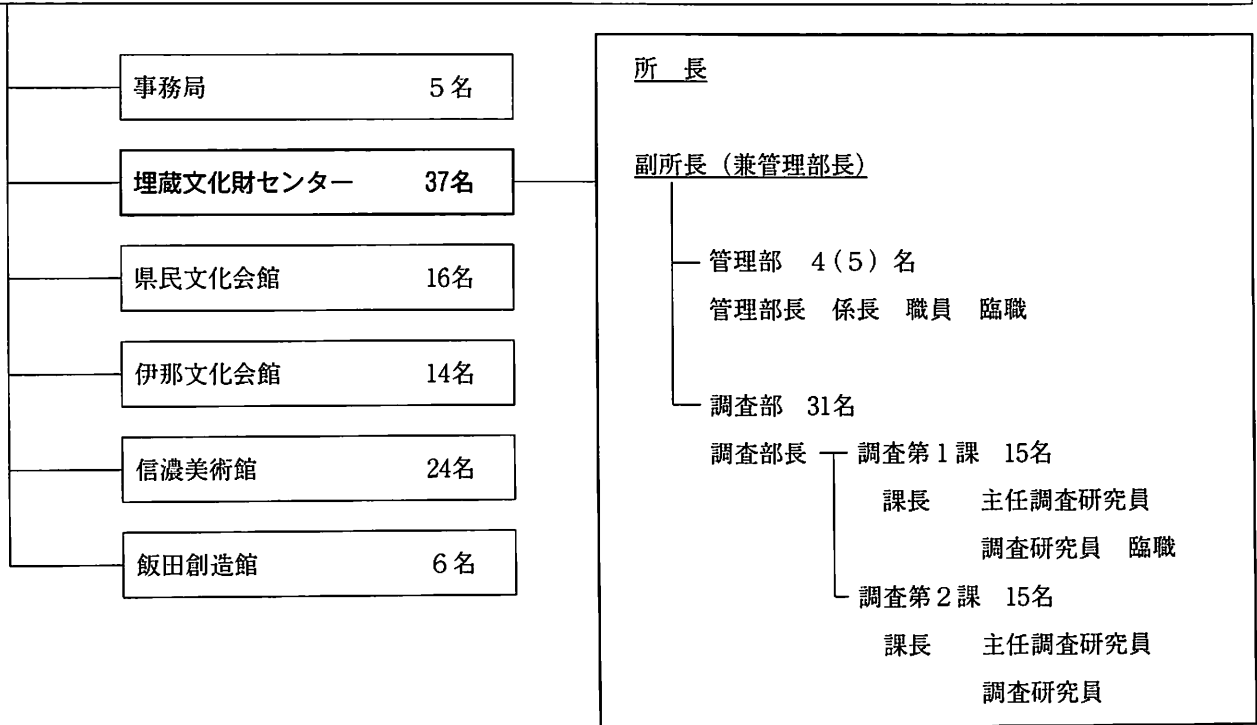
VI 組織・事業の概要

(1) 組織

財団法人長野県文化振興事業団

【役員】 10名

理事長	長野県副知事	副理事長	県芸術文化協会会長	常務理事	県生活環境部参事
理事	県民文化会館長	伊那文化会館長	松本文化会館長	駒ヶ根高原美術館副館長	
	サイトウ・キネン・フェスティバル松本総合コーディネーター				
監事	2名				



(2) 職員（事務系臨時職員を除く）

H23. 3.10現在

所長	窪田久雄	
副所長	阿部精一	
管理部	管理部長（兼）	阿部精一
	管理係長	窪田秀樹
	職員	西澤宏明 戸谷良子
調査部	調査部長	大竹憲昭
	調査課長	〔第1課〕 上田典男 〔第2課〕 岡村秀雄
	主任調査研究員	〔第1課〕 綿田弘実 町田勝則 〔第2課〕 廣瀬昭弘 市川隆之
	調査研究員	〔第1課〕 白沢勝彦 河西克造 鶴田典昭 西 香子 櫻井秀雄 廣田和穂 柳澤 亮 寺内貴美子 市川桂子 〔第2課〕 寺澤正俊 上田 真 若林 卓 中野亮一 藤原直人 川崎 保 谷 和隆 太田 潤 古賀弘一 内堀 団 曳地隆元 清水梨代
	調査員	〔第1課〕 大澤泰智 鈴木時夫

(3) 事業

経費はH23. 3. 10現在

事業名		委託事業者	事業個所	事業内容	経費(千円)	
受託事業	調査・整理・報告	中部横断自動車道	国土交通省 関東地方整備局	佐久市 北裏遺跡群ほか	発掘作業 整理作業	408,924
		一般国道474号 飯喬道路	国土交通省 中部地方整備局	飯田市 下村遺跡ほか	発掘作業 報告	18,452
		北陸新幹線	北陸新幹線建設局	長野市 沢田鍋土遺跡ほか	発掘作業 報告	18,278
		(主)長野上田線	千曲建設事務所	千曲市 上五明条里遺跡群ほか	整理作業	36,950
		一般国道18号 (更埴坂城バイパス)	国土交通省 関東地方整備局	千曲市 東條遺跡ほか	整理作業	39,517
		替佐・柳沢築堤	国土交通省 千曲川河川事務所	中野市 柳沢遺跡ほか	整理作業	37,632
研修	専門的知識技術の習得	県教育委員会	奈良文化財研究所	研修	218	
自主事業	速報展など	3月：速報展 長野県の遺跡発掘2010長野県立歴史館 7月：速報展 長野県の遺跡発掘2010県伊那文化会館 8月：夏休み考古学チャレンジ教室 2月：屋代市民ギャラリー展 3月：速報展 長野県の遺跡発掘2011 長野県立歴史館 随時：遺跡見学会				

長野県埋蔵文化財センター年報27 2010

発行日 平成23年3月31日

編集発行 (財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157

E-mail：info@naganomaibun.or.jp

印刷 鬼灯書籍株式会社